腹話術

ります。 とのまん中ほどにある、千平方メートルぐらいの小さな公園とのまん中ほどにある、千平方メートルぐらいの小さな公園とのまん中ほどにある、千平方メートルぐらいの小さな公園とのまんとが、学校の帰りに手をひきあって、赤坂見附の近くのい学校六年生の宮本ミドリちゃんと、五年生の甲野ルミちい学校六年生の宮本ミドリちゃんと、五年生の甲野ルミち

のです。のです。芝生のほうもがらんとしてだれもいないの姿が見えません。芝生のほうもがらんとしてだれもいないでいるのですが、その日はどうしたわけか、ひとりも子どもいつもは、ぶらんこやすべり台で、たくさん子どもが遊ん

な、しっかりした子でした。はからだも大きく、ふっくらした顔の色つやがよくて、快活はからだも大きく、ふっくらした顔の色つやがよくて、快活ミドリちゃんが、ふしぎそうにいいました。ミドリちゃん「まあ、さびしいわねえ。きょうはどうしたんでしょう?」

ルミちゃんが、そのほうを指さしました。もと……。」

で、人形のようにかわいい顔をしていました。

ルミちゃんは、ミドリちゃんにくらべると、

ずっと小がら

そのほうへ近づいていきました。 なんだかやさしそうなおじいさんなので、ふたりは、つい、かなかった。あのおじいさん、すばらしいひげね。」 「あら、ほんと。あんなすみっこにいるもんだから、気がつ

いあごひげも、みんなまっ白です。下から、まっ白な毛がふさふさとたれ、まゆも口ひげも、長をきて、小さな鳥うち帽をかぶっています。その鳥うち帽のたおじいさんが、ちょこんと腰かけていました。灰色の背広大きな木の下のベンチに、みごとな白ひげを、胸にたらし

だちになっていただくかい?」

そのおじいさんの膝に、五つか六つぐらいの、かわいい男に、同じがらの鳥うち帽を、かぶっていました。ほおがリンに、同じがらの鳥うち帽を、かぶっていました。ほおがリンがねの中から、ほそい目が、やさしそうに光っています。「ほら、かわいいおねえちゃんがいらっしたよ。 まおがリンに、同じがらの鳥うち帽を、かぶっていました。ほおがリンだちになっていただくかい?」

けれども、へんな子です。動かすと、まるで、耳までさけるように見えます。かわいい目は、なんて大きいのでしょう。赤いくちびるを、ぱくぱくかん高いきいきい声です。それにしても、この坊やの口と「うん。ぼく、こっちのおねえちゃんがすきだよ。」くぱくと、ひらいたり、とじたりしました。

すると、坊やの黒い目が、くるくると動き、

赤い口が、ぱ

おじいさんが、ひざの上の男の子にいいました。

「こっちのおねえちゃんて、この子かい?」

「うん、そうだよ。」 おじいさんが、ルミちゃんのほうを指さして見せました。

坊やが、きいきい声で答えました。

「ハハハ……。ぼうやが、あなたがすきだっていいます。

あ

なた、なんてお名まえ?」

おじいさんが、笑いながらたずねました。

て、はずかしそうに答えました。 ルミちゃんは、すきだといわれたので、ポッと顔を赤くし

「甲野ルミっていうの。」

ルミちゃんだよ。」 でいる黒沢というものですよ。坊や、このおねえちゃんはね、「おお、ルミちゃんだね。いい名だ。わたしは、青山にすん

「うん、ルミちゃんと、握手しよう。」

坊やが大きな口を、ぱくぱくさせました。

人形です。

も、このかわいい坊やがすきになってしまいました。それで、 「ハハハ……。坊やが、あなたと握手がしたいんですって。」 じぶんをすきだといってくれたので、ルミちゃんのほうで 坊やは、小さな手を、グッとこちらへさしだしました。

右手を出して、坊やの小さな手をにぎりました。

おやっ、なんというつめたい、かたい手でしょう。坊やの

手は、まるで木でできているように、ちっとも、うごかない ルミちゃんはびっくりして、手をはなしました。 のです。こちらがにぎっても、にぎりかえしもしないのです。

この坊やは、いったい、生きているのでしょうか。木かなに そして、へんな顔をして、坊やをじっと見つめています。

かでこしらえた、人形ではないのでしょうか。すると、おじ

いさんが、さもおかしそうに笑いだしました。

形なのさ。」 だよ。ジャックという名だよ。わたしのだいじなかわいい人 「ハハハ……。やっと、わかったかね。この坊やは人形なん

わりに、おじいさんが、口を動かさないで、子どもの声でし ゃべっていたのでしょう。」 「ああ、わかった。おじいさんは腹話術師なのね、坊やのか

ミドリちゃんがいいあてました。いつか、パパとママとい

なかったのです。見れば見るほど、まるで生きているような とうの坊やのようによくできているので、いままで気がつか 人形ということがわかったのに、おじいさんの人形は、ほん す。でも、そのときの人形は黒んぼうの人形で、はじめから っしょに寄席へいったとき、腹話術を見たことがあったので

さんがつくったの?」 りこうなおじょうさんだね。なんていう名?」 形だから、なかなか見わけがつかないのだがね。あんたは、 って、これは、わたしがたんせいしてこしらえた、上等の人 「宮本ミドリっていうの。それじゃあ、このお人形、 「そうだよ。よくわかったね。ふつうの腹話術の人形とちが

腹話術は、ちょっと、なぐさみにやっているだけさ。 なかなかうまいだろう?」 「うん。わたしは人形師なんだ。人形をつくるのが本職だよ。 しかし、

「ええ。この坊やが、ほんとうにしゃべっているように聞こ

えたわ。」

ほら、ごらん! またしゃべりだすから……。」 っぱると、目が動いたり、口をぱくぱくやったりするのだ。 っているのだよ。人形の首にしかけがあって、指でそれをひ 「こうして、わたしの右手が、人形の服の下から背中へはい おじいさんがそういったかと思うと、坊やの目がくりくり

犬や、ネコや……。| ャウジャ人形がいるんだよ。おとなの男もいるし、女もいる ぼく、ルミちゃんに話すんだよ。ね、ぼくのおじいちゃんは と動き、赤い大きな口が、ぱくぱくしはじめました。 んいる。それから、動物だっているんだよ。クマや、サルや、 し、おじょうさんもいるし、ぼくみたいな子どもも、たくさ 人形をつくる名人なんだよ。おじいちゃんの家にはね、ウジ すきだよ。ミドリちゃんは、そんなにすきじゃない。だから、 「ルミちゃん、ぼくと遊ぼうね。ぼく、ルミちゃんがとても

ました。

じいさんもすきになり、おじいさんの家にある、たくさんの 白ひげのおじいさんが人形づくりの名人だと聞くと、このお 人形が見たくなりました。 ても、やっぱり、坊やがすきでたまりませんでした。それに、 くるっ、くるっと動かします。ほんとうにかわいい坊やです。 ルミちゃんは、その顔を見ていると、人形だとわかってい そういうたびに、かんじょうをするように、大きな目を、

「美しいおねえさまの人形もあるの?」

そのおねえさまが、やさしい声で歌をうたうんだよ。」 しめた、うっとりするようなおねえさまがいるよ。そして、 「まあ、歌をうたうの? 人形が?」 「うん、あるよ。ゆうぜんのふり袖を着て、きんらんの帯を

> よ。ぼくだって生きているだろう?」 ともできる。おじいちゃんの人形は、みんな生きているんだ 人形をつくるんだよ。歌もうたうし、ものもいうし、歩くこ 「うん。ぼくのおじいちゃんは名人だからね。機械じかけの ルミちゃんは、坊や人形の話を、目をかがやかして聞きい

うがないのです。 ゃんの手をひっぱって、すこしはなれたところへつれていき そのときミドリちゃんが、「ちょっと。」といって、ルミち

っていました。もう、おじいさんの家の人形が見たくてしょ

るをいっているのだと思いました。 といったので、ミドリちゃんは、 とをききません。すっかり、おじいさんがすきになってしま 形なんて、なんだか気味がわるいわ。ね、帰りましょうよ。」 ったからです。それに、坊や人形が、ルミちゃんだけすきだ 「ね、もう帰りましょうよ。ものをいったり歩いたりする人 ミドリちゃんがささやきましたが、ルミちゃんは、いうこ やきもちをやいて、いじわ

て、ベンチの前にもどりました。 ミドリちゃんは、しかたがないので、しばらく待ってから、 ルミちゃんはそういって、ミドリちゃんの手をふりはらっ

さきに帰ってもよくってよ。」

とをききません。とうとう、けんかになってしまいました。 るようにすすめましたが、ルミちゃんは、どうしてもいうこ また、はなれたところヘルミちゃんをひっぱっていって、帰 「じゃあ、あたし、さきに帰るわ。」

「あたし、もっと坊やのお話を聞きたいわ。ミドリちゃん、

のでした。 ミドリちゃんはそういって、さっさと公園の外へ出ていく

生きた人形

れて、とうとう、おじいさんの家へいってみることになりま あとに残ったルミちゃんは、白ひげのおじいさんにさそわ

から、わけはないよ。晩のごはんまでには、お家へおくって 「なあに、すぐ近くだよ。公園の外に自動車が待たせてある

あげるからね。」 よく考えてみれば、腹話術のおじいさんが、自動車を待た おじいさんは、やさしい声でそんなことをいいました。

けなかったのです。いくらやさしいおじいさんだって、 めてあった人につれられていくなんて、いけないことでした。 はありませんか。ルミちゃんは、もっと用心しなければ、い せて、公園のベンチに腰かけているなんて、なんだかへんで

かったのです。 形が見たくて、もう夢中でした。なにも考えているひまもな しかし、ルミちゃんは、歌をうたったり、歩いたりする人

ゃんはそのあとからついていきます。 おじいさんは、坊や人形をだいて歩きだしました。ルミち

しろの席に腰かけますと、自動車は、すぐに走りだしました。 んが近づくと、運転手がとびだしてきてドアをひらきました。 坊や人形を中にはさんで、おじいさんとルミちゃんが、う 公園の出口に、りっぱな自動車がとまっていて、おじいさ

> なってきました。 町かどをあちこちとまがりながら、進んでいきます。もう、 ルミちゃんのまったく知らない町です。なんだか、心ぼそく

「おじいさん、まだ遠いの?」

「なあに、もうすぐだよ。」

たのを聞きもらしたのでしょうか。 けなかったのです。ルミちゃんは、おじいさんが青山といっ した。ルミちゃんは、ここでまた、うたがってみなければい 黒沢というものだ。」と名のりました。公園は赤坂見附の近く 車はとまりません。さっきおじいさんは、「青山に住んでいる ん。自動車は、さっきからもう二十分いじょうも走っていま にあるのですから、青山まで、そんなに遠いはずはありませ そんな会話が、なんどもくりかえされましたが、なかなか

ろです。その原っぱの、草のぼうぼうはえた中に、 ました。なんだか、焼けあとの原っぱのようなさびしいとこ だての木造の西洋館が立っていました。 それからまた十分ちかくも走って、やっと自動車がとまり 古い一階

「さあ、ここがわたしの家だよ。」

手でルミちゃんの手をひいて、草の中を歩いていきます。 いかい、ほら、ごらん。」 「ルミちゃん、この坊やもね、ほんとうは歩けるんだよ。い おじいさんは自動車をおりて、右手で坊や人形をだき、 左

れもしないで、機械じかけのようなへんなかっこうで、ピョ コピョコと、歩きだしたではありませんか。 しますと、これはどうでしょう。坊や人形は、そのままたお そういって、右手にだいていた人形を、そっと地 面におろ

「ルミちゃん、はやくいらっしゃい。こっちだよ。」

にちがいありません。 生きているようです。 歩きながら、 坊や人形がそんなことをいうのです。まるで しかし、 これも、おじいさんの腹話術

おじいさんは、ポケットから大きなかぎを出して正面

ふたりの人間と、ひとりの人 中へはいっていきました。

形が、

その

ドアをひらき

入口のドアがパタンと

閉まったとき、ルミち やんは、 ッと、 なんだかゾー からだが寒く

悔しはじめたのです。 す。こんな気味のわるいところへこなければよかったと、 なってきました。 なんともいえない、 恐ろしい気がしたので 後

「おじいさん、あたし、もう人形なんか見なくてもいいから、 ねえ、帰らして!_

ルミちゃんがそういいますと、おじいさんはやさしく笑っ

こちらへいらっしゃい。」 いものを見るんじゃないか。 「ハハハハ……。なにをいいだすんだね。これからおもしろ さあ、そんなことをいわないで、

らいて、 ら、家の中は、もううす暗くなっています。廊下のドアをひ 暗い廊下を、ぐんぐんとはいっていくのです。夕がたですか ードのカーテンがしめてあったのです。 かったのですが、その部屋の窓には、ぜんぶ、 そういって、かたくルミちゃんの手をにぎったまま、 部屋にはいりました。部屋はまっ暗です。 あつい黒ビロ あとでわ うす

「待ちなさい。いま、ろうそくをつけるからね。」

ぼんやりと照らしました。 そくが立っているのです。 そくに火をつけました。古めかしいしょく台に、三本のろう おじいさんはそういって、マッチを出して、机の上のろう その赤ちゃけた光が、 部屋

服を着た人間や、 部屋でしたが、その四方の壁ぎわに、洋服を着た人間や、 っ。」といったまま、 っていたからです。 ルミちゃんは、かすかな光で、部屋の中を一目見ると、「あ はだかのままの人間が、ウジャウジャと立 立ちすくんでしまいました。 かなり広い 和

びっくりしましたが、よく考えてみると、それはみんな人形 人間とそっくりではありませんか。 ん。でも、 ただ、じっと、つっ立っているばかりで、すこしも動きませ なのでしょう。 この家には、こんなにたくさん人が住んでいるのかしらと、 なんてよくできた人形でしょう。 あっちをむいたり、こっちをむいたりして、 みんな、 生きた

です。見ていると、ゾーッとこわくなってきます。もせずつっ立っているありさまは、じつに気味のわるいものたくさんの人形が、しいんとしずまりかえって、身うごき

たね。いま、呼んであげるよ。」「ああ、ルミちゃんは、ふり袖のおねえさまが見たいのだっ

のおしボタンの一つを、グッとおしました。おじいさんはそういって、机の横についている、たくさん

とがありません。ただもう、ぽかんと口をあけて、見とれてルミちゃんは、こんな美しい顔を、いままで一度も見たこって、長いたもとのゆうぜんの着物を着て、ピカピカ光るきわれました。十七一八のきれいな女の人です。髪は島田にゆひらいて、そこから、目もさめるような美しいものが、あらすると、部屋のむこうのすみのドアが、スーッと音もなく

ばかりにあでやかです。したがって、その顔はいよいよ美しく、着物や帯はかがやく歩きかたで、だんだんこちらへ近づいてきました。近づくにそのきれいなおじょうさんは、すり足のような、みょうな

いるばかりです。

「これはルミちゃんだよ。おまえに会いたいというので、つの長い黒い目が、ぱちぱちとまたたきました。人形の小さい口がひらいて、白い歯が見えました。まつげ「あら、お客さまね。まあ、かわいいわね。どこのかた?」

「まあ、ルミちゃんっていうの。仲よしになりましょうね。」おじいさんが答えました。

れてきたんだよ。」

のでしょうか。ルミちゃんには、とてもそうは思えませんでに人形でしょうか。この美しい声が、おじいさんの腹話術な玉をころがすような美しい声です。ああ、これがほんとう

形にすることもできるのだよ……。」とは思わないかね。ウフフフ……、わしは、生きた人間を人ね。いや、それよりは、ルミちゃんもこんな人形になりたいしいおねえさまと、いつまでも遊んでいたいとは思わないかせいをこめてつくりあげた人形だよ。ルミちゃんは、この美「ハハハ、……びっくりしているね。どうだ、わしが、たん

ぶるぶるふるえてきました。ッと血がひいていくような気がしました。そして、からだがっと血がひいていくような気がしました。そして、顔から、サーそれを聞くと、ルミちゃんは、ぞっとして、顔から、サー

恐ろしい魔法

「あたし、人形になるの、いやだわ。」

ってあげなさい。」がいい。さあ、紅子、ルミちゃんをおまえの部屋へつれていがいよ。あちらへいって、このおねえさま人形と遊んでくる「いやかね?」だが、もうじき人形になりたくなるかもしれールミちゃんは、ふるえ声で答えました。

そこは、鏡台や、美しいたんすや、ガラス箱にはいったおゃんの手をひいて、じぶんの部屋へつれていきました。そこで紅子さんは、おじいさんにいわれたとおり、ルミちおねえさま人形は、紅子という名でした。

黒いカーテンがかけてあって、机の上のしょく台に、ろうそ 人形などの飾ってある、きれいな部屋でした。ここも、窓に

くの火がちろちろとゆれていました。

にすわり、 紅子さんは、ルミちゃんをすわらせ、じぶんも、そのそば やさしい顔で、じっとルミちゃんを見つめるので

う。生きているんでしょう?」 「おねえさまはほんとうに人形なの? そうじゃないでしょ

まずそのことをたずねてみました。 ルミちゃんは、さっきからふしぎでたまらなかったので、

そして、もうじき、あとの半分も死んでしまって、ほんとう のお人形になるの。」 「ええ、生きているの。でも、半分しか生きていないのよ。

つめるばかりです。 ルミちゃんは、びっくりして、まじまじと紅子さんの顔を見 紅子さんは、なんだかわけのわからないことをいいました。

半分生きているというのはほんとうなのよ。おじいさんがそ 「ほほほほほ……。 わたしのいいかたが悪かったわね。でも、

ぶんで動かしているのよ。」 からだを動かすのも、機械じかけではなくって、わたしがじ ないことはわかるでしょう。それから、わたしが歩くのも、 ばにいないのだから、わたしの声が、おじいさんの腹話術で

死んでいるなんていうの?」 「じゃあ、 おねえさまは生きているのだわ。 どうして、 半 分

え話をしましょうか。| 「ではね、ルミちゃんによくわかるように、わたしの身のう

> 顔を見つめました。 ルミちゃんは目をかがやかせて、じっと紅子さんの美しい

「ええ。」

じいさんの口ぐるまにのって、とうとうこんなことになって まわないから、一生美しくいたいと思ったのよ。そして、お ね。』というのよ。そのとき、わたし、魔法をかけられてもか と、『わたしのうちへおいで。いまの美しさのまま、しょうが ひとりごとのようにいったのです。すると、おじいさんが、 をとりたくない。いまのままで年をとらないでいたいわ。』と、 たしは、じぶんでもなんだかそんなふうに思っていたので、『年 まが、一生のうちでいちばん美しいときだよ。』というの。 じいさんがわたしの顔をつくづくながめて、『紅子さんは、 なぜわたしがこの家へきたかといいますとね、あるとき、 のよ。でも、ここへきたのは、つい二週間ぐらいまえなの。 い年をとらないようにしてあげる。わしは魔法つかいだから いうじゃありませんか。『では、どうすればいいの。』ときく へんな笑いかたをして、『年をとらないくふうがあるよ。』と 「わたし、ここのおじいさんは、ずっとまえから知っていた

には、まださっぱり、わけがわかりません。 こんなことって、どういうことなのでしょう、 ルミちゃん

しまったのよ。」

が、だんだんかたくなっていって、人形になってしまうのよ。 ぎな薬を発明したのよ。その薬を注射すると、人間のからだ ルミちゃん、わかる? わたし、 人形になってしまっているのよ。 「おじいさんはね、魔法つかいのような発明家なのよ。ふし その薬で、もう半分ぐらい ほら、ここをさわってごら

んなさい。」

ともいえないへんな気持になって、思わず涙ぐんでしまいまではありませんか。ルミちゃんは、ハッと手をひいて、なんでしょう。それに、このつめたさはどうでしょう。土の上にさわってみました。おやっ、なんてかたくて、すべっこい手紅子さんが両手を前に出したので、ルミちゃんは、それに



こいのです。生きた人間のはだではありません。みました。手と同じように、つめたくて、かたくて、すべっを出しましたので、ルミちゃんは、またそのほおにさわって紅子さんが、美しい顔をルミちゃんに近よせて、右のほお

ても、 そして、 ら、そういう気持はわからないでしょうね。」 あさんなんかになりたくないわ。たとえ人形になってしまっ しょう?それに、 とろえないで残るのだわ。人間は、どうせいつかは死ぬんで のかわりに、わたしの若さと美しさは、 くなってしまうのよ。つまり、人間が人形にかわるのよ。そ っていって、しまいには、おなかの中までこちこちになって、 「わかって? こんなふうに、外がわから、だんだんかたま いまの若さでいたいのよ。ルミちゃんはまだ小さいか もう息もできなければ、 わたし、長生きして、しわくちゃのおば ものをいうことも、できな 永久に、 すこしもお

ってくるのでした。し、うすうすその気持がわかるだけに、かえって恐ろしくな。んの気持が、まったくわからないわけではありません。しかふしぎな話を聞いていました。ルミちゃんにだって、紅子さいミちゃんは、くいいるように紅子さんの顔を見つめて、

目には、涙があふれてくるのです。した。胸の中に、つめたい風が吹いているような感じがして、いこちゃんは、こわい夢をみているのではないかと思いま

味わるく、にやにや笑って立っていました。きたのか、そこに、あの魔法つかいのおじいさんが、うす気ギョッとしてふりむきました。すると、いつのまにはいって、そのとき、うしろにかすかな音がしたので、ルミちゃんは、

ルミちゃんは、それを聞くと、ゾーッとして、いきなりい

すから立ちあがりました。

「いやよ。あたし、人形になんかになるのいやだわ。」

「おっと、どっこい。逃げようたって、もうだめだよ。さあ、 そう叫んで、部屋から逃げだそうとしました。

おとなしくしておいで。いまに、かわいい、かわいいお人形

さんにしてあげるからね。」

さやきつづけるのでした。 かりだきとめて、耳のそばに口をよせて、恐ろしいことをさ 魔法つかいのおじいさんは、ルミちゃんのからだを、しっ

ルミちゃん人形

っても帰らないので、大さわぎになっていました。 赤坂見附に近いルミちゃんの家では、ルミちゃんが夜にな

甲野さんのひとりっ子ですから、おとうさんやおかあさんの 社の重役で、たいへんお金持ちでした。ルミちゃんは、その 心配は、ひととおりではありません。 ルミちゃんのおとうさんの甲野光雄さんは、ある大きな会

ました。 家へつれていかれたのではないか、ということなどがわかり つかいのおじいさんと話をしていたから、あのおじいさんの ゃんとわかれたこと、そのときルミちゃんは、白ひげの人形 が、やがて、お友だちの宮本ミドリちゃんが、公園でルミち つかいを出したりして、ルミちゃんのゆくえをさがしました 学校や、お友だちのうちや、ほうぼうへ電話をかけたり、

ミドリちゃんはまた、 おじいさんが、「わたしは青山に住ん

でいる黒沢というものですよ。」といったあのことばも、ちゃ

きませんでした。 ういう白ひげのおじいさんは、どうしても見つけることがで 警察では、青山の黒沢というおじいさんを探しましたが、そ んとおぼえていました。 甲野さんは、すぐにこのことを警察に知らせましたので、

おじいさんが人形をだいてベンチにこしかけていたという公 園のまわりの店屋などを、一軒一軒しらべましたが、これと いったのにちがいありません。しかたがないので、警察では、 いう聞きこみもないままに、一日二日と日がたっていきまし あのおじいさんは、名まえも住まいも、でたらめのうそを

とおいのりしたり、うらないにみてもらったり、すこしも家 おまいりして、「どうかルミちゃんがぶじでいますように。」 しだすために夢中になっていました。おかあさんは、神社に りではありません。おとうさんの甲野さんは、会社も休んで にじっとしてはいられないのでした。 へ出かけて、捜索のようすをたずねたり、ルミちゃんをさが しまって、新聞に「たずね人」の広告を出したり、毎日警察 ルミちゃんのおとうさんやおかあさんの心配は、ひととお

メートル半ばかりの長っぽそい木の箱を、こもでつつんだも 甲野さんの家へ大きな荷物が配達されました。郵便ではなく う十日もたってしまいました。その十日めの午後のことです。 て、運送屋がトラックにつんで持ってきたのです。 そんなふうにして、ルミちゃんがいなくなった日から、も それは、 りんご箱をひとまわり大きくしたような、長さ一

のでした。

けとりました。 雄さまとなっており、住所もまちがいないので、ともかく受善さしだし人の名はありませんが、あて名はたしかに甲野光

中は白い木の箱で、そのおもてに、毛筆の大きな字で、甲野さんの家の女中さんたちが、こもをといてみますと、

甲野ルミの棺

と書いてあるではありませんか。

て、あわててこのことを奥へ知らせたのです。女中さんたちは、ギョッとして顔を見あわせました。そし

ふたりとも、箱をあけるのが恐ろしいので、いつまでも、なってしまいました。おかあさんは、もう涙ぐんでいます。と書いた木箱を見ると、ふたりともハッとして、まっさおにびっくりして玄関へとびだしてきましたが、「甲野ルミの棺」それを聞くと、ルミちゃんのおとうさんとおかあさんは、

ろしいのです。 がとれるようになっても、それをとりのけて中を見るのが恐こじあけると、すぐにひらきました。そして、いつでもふたてみることにし、金づちや釘ぬきを持ってこさせました。がないので、おとうさんの甲野さんは、思いきって箱をあけだまってつっ立っていました。でも、そうしていてもしかた

う決心して、サッとふたをとりました。 甲野さんは、まだしばらくためらっていましたが、とうと

たわっていました。学校へいったままの服装です。(ああ、やっぱりそうでした。箱の中には、ルミちゃんが横

泣き声がおこりました。きふしました。女中さんたちのあいだに、「ワーッ。」というおかあさんは、そのルミちゃんのからだに取りすがって泣

を、じっと見つめました。おかあさんをしずかにひき起こし、箱の中のルミちゃんの姿中野さんも、目にいっぱい涙を浮かべて、泣きふしている

そうな明るい表情です。めてはいないで、うっすらと赤みがさし、いまにも笑いだしらしい黒い目を、ぱっちりと、見ひらいています。顔も青ざああ、これがルミちゃんの死がいなのでしょうか。かわい

どこかにきずがあるだろうと思ったからです。らだを、あちこちと、しらべてみました。殺されたとすれば、なりだを、あちこちと、しらべてみました。殺されたとすれば、なりがでいいです。

生きていたときの半分もめかたがないように思われます。へんなのです。ルミちゃんは、こんなに軽かったでしょうか。りません。それに、ルミちゃんのからだのようすが、どうもしかし、いくらさがしても、きずあとなんか一つも見あた

んか。たいてみました。すると、こつこつと音がするではありませたいてみました。すると、こつこつと音がするではありませがありません。甲野さんは、指のつめでルミちゃんの顔をたたいのです。いくら死がいだって、こんなにかたくなるはずそれに、顔も手も足も、なんだかこちこちして、いやにか

れかが、ルミちゃんとそっくりの人形を送ってきたんだよ。」「あっ、これは人形だよ。泣くことなんかありゃしない。だ

さんも、人形だということを気づいていました。甲野さんにいわれるまでもなく、もうそのときは、おかあ

「ちっきら、ふく。女中さんたちは、

「あらまあ、お人形さんでしたの?」

isit棺なんて書いてあるもんだから、すっかりだまされちゃっ

ょう。かわいいわね。」「でも、この人形、なんてルミちゃんによくにているんでし

そのときおかあさんは、なにかに気づいて、ハッとしたよこれはなにか、深いわけがあるのではないでしょうか。に、ルミちゃんとそっくりの人形を送ってきたのでしょう。甲野さんは腕ぐみをして、じっと考えこんでいました。などと、にわかに明るい声をたてるのでした。

わたしがじぶんでなおしてやったのですもの、よくおぼえてここに、かぎざきをなおしたあとがあるでしょう。これは、「ねえ、あなた。この洋服は、たしかにルミちゃんのですわ。

うに甲野さんの顔を見あげました。

ますわ。」

くるようで、もう気が気ではありません。ルミちゃんがかわゃんがころがされている姿が、まざまざと目の前に浮かんでされて、どこかに閉じこめられているのではないでしょうか。のでしょうか。いったい、どうしてそんなことをしたのでしのでしょうか。いったい、どうしてそんなことをしたのでし

のに、こうは、ほうこうに、彩ぎのこうぎんです。なったのであれたが、読者のみなさんは、知っていますね。箱の中に横たわー 甲野さんもおかあさんも、そこまでは気がつきませんでしした。 いそうで、またしても、目にいっぱい涙があふれてくるのでいそうで、またしても、目にいっぱい涙があふれてくるので

形にしてしまったのではないでしょうか?かしたら、あの魔法つかいのおじいさんが、ルミちゃんを人っていたのは、ほんとうに人形だったのでしょうか?(もした)、記者のみださんに(矢)でしますれ、糸の中に樹だれ

だにも、おこったのではないでしょうか。うのだといいました。それと同じことが、ルミちゃんのからなっていって、しまいには、ほんとうのお人形になってしまおねえさま人形の紅子さんは、だんだん、からだがかたく

心配そうに顔を見あわせながら考えこんでいました。のはいった箱を奥ざしきにはこばせて、その前にすわって、おとうさんとおかあさんは、ともかくも、ルミちゃん人形

見ひらかれるのが、よくわかりました。野さんの顔がサッと青ざめ、ギョッとしたように目が大きくおかあさんがこちらから見ていますと、受話器をとった甲しくなりひびいたので、甲野さんが受話器を耳にあてました。するとそのとき、隣の部屋にある電話のベルが、けたたま

つ手が、ぶるぶるふるえています。 甲野さんが、どもりながらどなりつけました。受話器を持「き、きみは、いったい、だれだっ?」

小林少年

甲野さんがびっくりしたのは、むりもありません。受話器

ちゃんは、わしがあずかっている。なぜあずかっているかは からは、じつに恐ろしいことばが聞こえてきたのです。 「甲野光雄さんかね。わしは黒沢というものだ。きみのルミ

あすの夜十時に、きっと取りにいく。そのとき、警察などを まいました。 したがわなかったら、 るのだ。それじゃ、 くらかぎがかかっていても、わしには、自由にひらく力があ しのはいる入口を用意しておいてくれなくてもよろしい。い としてはいけない。わかったかね。あすの晩は、べつに、 ンドーに飾るのだ。それがいやだったら、わしをとらえよう 方法をこころえているからね。そして、どこかのショーウィ 形になってしまうぞ。わしは、生きた人間で、人形をつくる よんで、わしをつかまえようとしたら、ルミはほんとうに人 の書斎の机のひきだしへ、札たばを入れておけばよろしい。 てこいというのじゃない。わしのほうから取りにいく。きみ たいからだ。一千万円でよろしい。それも、どこそこへ持っ いうまでもないことだ。きみから身のしろ金をちょうだいし そして、こちらがなにも答えないうちに、電話がきれてし 約束したよ。もし、このわしのさしずに ルミが人形になるのだ。 わかったね。」

のお顔、まっさおですわ。」 「まあ、 ルミちゃんのおかあさんが、 あなた、 まの電話、 じぶんも青くなって、 だれからでしたの? 心配そ あなた

んに、電話のいみを、話してきかせました。 甲野さんは、女中さんたちをとおざけておいて、おかあさ

「警察にとどけるのがあたりまえだが、そうすると、

新聞に

うにたずねました。

うのだよ。」 むこうのいうままになるのも残念だし、金だけとられてルミ よく知っている。一千万円がおしいのではない。ルミの命が 友だちがせわになったことがあるので、明智さんの腕まえは にたのもうと思う。明智小五郎という名探偵がいる。わしのわせるかもしれない。それよりも、わしは、そっと私立探偵 くなる。あいつは、やけくそになって、ルミをどんなめにあ 書きたてられる。身のしろ金をわたそうとしても、わたせな たのんで、そういうことがないように、よく相談しようと思 が帰ってこなかったらたいへんだ。それで、腕のある探偵に 一千万円で買えるなら安いものだ。しかし、なにもしないで

偵事務所を呼びだしますと、子どもらしい声が電話口に出ま れに賛成しました。 そこで甲野さんは、 甲野さんのいうことはもっともなので、おかあさんも、そ 奥まった部屋のべつの電話で、明智探

わ

ん。いそぎのご用ですか?」 「明智先生は事件で旅行中です。 四 | 五日お帰りになりませ

した。

「じつは、ひじょうに重大な、 いそぎの用件なのですが、こ

す中のことをまかされている、小林というものです。」 「では、ぼくがおうかがいしましょうか。ぼく、先生からる きみが、うわさにきい ている小林君ですか。 それじ

ゃあ、すぐきてくれませんか。」

した。それに、小林少年にあえば、 甲野さんは、 小林少年のてがら話を、いろいろ聞いていま 明智探偵の旅行さきもわ

てもらうことにして、道じゅんを教えました。 かり、電話で相談することもできるのですから、 ともかくき

のテーブルをかこんで、甲野さん夫婦と小林少年とが、 はごく近いので、それから二十分もたったころには、応接間 麹 町アパートの明智探偵事務所と、赤坂の甲野さんの家と ひそ

いう家は発見できなかったのです。」 で、警察では、青山へんを手をつくしてしらべたが、黒沢と ルミの友だちが、『青山の黒沢』といったのをおぼえていたの 「電話でも黒沢と名のっていたが、これはどうも偽名らしい。

ひそ話をしていました。

ましたが、 甲野さんが説明しますと、小林少年は、 しばらく考えてい

ょうか。」 うちのかたで、その運送屋の名をおぼえている人はないでし 「ルミちゃんの人形は、運送屋がはこんできたのですね。お

「それは女中さんが知っているかもしれません。」

それは「木の宮運送店」というのでした。 とりの女中さんが、 の横に大きく書いてあった運送屋の名をおぼえていました。 ったので、名まえはおぼえていないと答えましたが、 うけとった女中さんは、運送屋が送り状をのこしていかなか そこで、女中さんたちを呼んでたずねてみますと、荷物を たいへんものおぼえがよくて、トラック もうひ

話で相談したうえで、きょうのうちに、人形じいさんの家へ かくその運送店をさぐってみます。それから、明智先生に電 ありません。電話帳を見ればわかるでしょう。ぼくは、とも 「めずらしい名まえですから、同じ店がたくさんあるはずは

「では、やってみてください。くれぐれも、あいてにさとら

く、女の子に変装します。そして、人形じいさんと知恵くら 時間があります。それには、このままの姿ではだめです。ぼ しのびこんでみます。いまはまだ二時ですから、じゅうぶん べをやるのです。」 てきぱきと、こともなげにいう小林君の顔を、 甲野さんは

感心して見つめていましたが、 ように、そんな変装ができるかしら。」 「あんたが女の子にばけるんだって? 相手に気づかれない

と、心配らしくたずねました。

女の子の洋服も和服も、いつでもつかえるように、事務所に す。いつも、ばれたことはありません。ぼくのからだにあう 「だいじょうぶです。ぼく、なんどもやったことがあるんで

絡するつもりです。そして、つかまえてもらいます。」 などは、 係もないものとして、探偵します。お金を取りにくるじゃま りかえしたあとで、そいつをつかまえてやりたいのですよ。」 そのままほうっておくのが残念なのです。それで、ルミをと 金をわたすのは、すこしもおしいわけではない。ただ悪人を うは、あすの晩までに、一千万円の現金を用意しておきます。 のうえでやってくださいよ。もし、あいてに気づかれたら、 ちゃんと用意してあります。」 めておいて、ルミちゃんが帰ってこられたあとで、警察に連 ルミがどんなことになるかわからないのだからね。わしのほ 「わかりました。ですから、ぼくは、甲野さんとはなんの関 「それならいいが、いずれにしても、明智先生に電話で相談 けっしてしません。ただ、あいての住みかをつきと

-13-

れないようにね。」

事務所へひきかえしました。 小林少年はいとまをつげると、 いそいで明智探偵

そこで、

おばけやしき

電話で明智探偵のおとなの助手を呼んで、その店をしらべて 小林少年は事務所に帰ると、木の宮運送店の住所をしらべ、

もらうことにしました。

とは、 すが、それには、子どもの小林君ではだめだからです。 なぜ、おとなの助手を呼んだかといいますと、こういうこ 警察の刑事だといってしらべたほうがうまくいくので

杉並区の原っぱの中の一軒家に住んでいる、白ひげの老人で、 なんなくその人物の住所をききだしました。それは、おなじ 長い木箱をはこんだのは、だれにたのまれたのかとたずね、 おとなの助手は、刑事らしい服装をして杉並区の木の宮運 今日の昼すぎに赤坂の甲野さんのうちへ、ほそ

した。名まえは赤堀鉄州というのです。みょうな人形ばかり作っている、かわりものだということで 大阪のホテルへ電話をかけて相談しますと、「よく注意して、 それがわかったので、小林少年は、明智探偵の旅行さきの

て自動車に乗って、助手に教えられた杉並区の一軒家へとい て、十四―五歳のかわいい少女にばけてしまいました。 そこで小林君はかつらをつけ、おけしょうをし、洋服をき そし

林君の腕まえをよく知っていたからです。

やってみたまえ。」と、おゆるしが出ました。

明智探偵も、

小

そぐのでした。そのころは、もう日ぐれに近くなっていまし

きますと、むこうに、平家だてのこわれかかったような、 ずっとてまえで自動車をおりて、その原っぱへ近づいてい

い西洋館が見えてきました。

小林少年は、その青年が近づくのをまって声をかけました。 らへ歩いてくるのです。牛乳屋のようでした。少女にばけた から、ひとりの青年が自転車をひっぱって、草の中を、こち けやしきという感じです。見ると、そのおばけやしきのほう うです。まわりには草がぼうぼうとはえ、どう見ても、 ほとんどはげてしまって、板もところどころくさっているよ 「あのう、ちょっとうかがいます。」 板ばりに青いペンキがぬってあるのですが、そのペンキが

でした。 すっかり女の声になっています。小林君は、 なかなか名優

こして立ちどまりました。 青年は、 かわいらしい少女に呼びかけられたので、 にこに

「あの西洋館、赤堀鉄州という人の家でしょう?」

げさんといってるよ。気味のわるいじいさんだよ。」 「ああ、そうだよ。このへんじゃあ、おばけやしきの、 おひ

ぼくの配達した牛乳が、きのうのままドアの外におきっぱな ことがあるんだ。そのたんびに、牛乳をくさらせてしまう。 で、ときどき、ふらふらっと、どこかへ出かけて、帰らない あの家にはだあれもいやしないよ。おひげさんはかわりもの 「きのうからるすだよ。じいさんはひとりものだから、いま、 「そのおじいさん、いま、家にいるでしょうか。」

しになっているんだよ。」

青年は、なかなかおしゃべりです。

「そのおじいさん、人形を作るのでしょう? それから、 腹

話術もできるんでしょう?」

は、 げさんを知っているの? だが、あんな家に近よらないほう がいいよ。ひどいめにあうかもしれないよ。」 「腹話術はどうか知らないけれど、人形は作るよ。 気味のわるい人形が、ウジャウジャいるよ。きみ、 あの おひ 家に

をきいたものだから、 ありがとう。」 「ええ、あたし、いかないわ。お友だちにおじいさんのこと ちょっとおたずねしただけよ。どうも

りながら、むこうへ遠ざかっていきました。 も「さいなら!」といって、自転車に乗り、 そして、西洋館とはんたいのほうへ歩きだしたので、 あとをふりかえ 青年

ぶきみな西洋館のほうへひきかえしました。 少女の小林君は、青年の自転車が見えなくなるのを待って、

と音がして、たやすく開いたではありませんか。 入口のドアに近よって、とってをまわしてみると、 ガチッ

「おやっ、かぎもかけていないのかしら。」

します。 くて、いまにも、 と、おどろきながら、そっとのぞいて見ました。 すみのほうから怪物があらわれそうな気が 中はうす暗

閉じこめられているかもしれないと思うと、 出てきました。 くためらっていましたが、ルミちゃんが、この家のどこかに さすがの 小林君も、 なんだか気味がわるくなって、 にわかに勇気が しばら

> い廊下を奥のほうへ、しのび足で歩いていきます。 そのまま中にはいって、ドアをしめ、玄関をあがって、 暗

りました。なにかしらやわらかいものが、サーッと、 ところが、十歩も歩かないうちに、ギョッとして立ちどま 小林君

の顔をなでたからです。

えをしてよく見ますと、 いることがわかりました。 では、やっぱり人間がかくれていたのかと、きっと身がま 顔のまえに、長い髪の毛がさがって

ます。つまり、その女は、 がっていたのです。 それは人間の髪の毛でした。髪の毛の上に、女の顔があり てんじょうからさかさまにぶらさ

白い着物をきて、たもとがだら

思いかえして、もう一度、じっと げだしそうになりましたが、ふと んとたれています。 くちびるから赤い血 小林君は、 れているのです。 その顔のものすごさ おもわず逃 顔はまっさ

女の顔を見つめてみました。

「なあんだ、 おばけ人形じゃないか。」

きで、てんじょうから見物の頭の上にとびついてくる、 小林君は笑いだしました。それは、見せもののおばけやし あの

幽霊の人形だったのです。

ら、 怪老人は、ぶきみな人形ばかり作っているというのですか 廊下に幽霊人形がぶらさげてあっても、べつにふしぎで

リエのような部屋で、むこうの壁ぎわに、奇怪な人形どもが、 た。暗くてはっきりはわからないけれど、その中は広いアト はありません。 そこをとおりすぎて二一三歩いくと、ドアが開いていまし

いきました。 ウジャウジャ立っているらしいのです。 少女姿の小林君は、だいたんに、その広い部屋へはいって

うなおばけ人形、幽霊人形ばかりなのです。 やっぱり人形でした。しかも、それがみんな、 そばまでいってみますと、ウジャウジャと立っているのは、 ゾッとするよ

ないと考えたからです。 ルミちゃんが、 小林君は、それらの人形に、 おばけ 人形の中に、かくされているかもしれ ーつ一つさわってみました。

がかくされているようすもありません。 しかし、どれも、こちこちした人形ばかりで、生きた人間

٨ 老人は、よろいをきた武士の人形なども作るのかもしれませ した。よく見ると、それは、むかしのよろいびつでした。怪 人形どものまえに、大きな箱のようなものがおいてありま

大きなよろいびつですから、 人間がかくれることもできま

す。

と思うと、 「もしや、この中にルミちゃんが……。」 小林君は、胸がどきどきしてきました。

の重いふたを両手で持ちあげ、中をのぞいてみました。 しばらくためらっていましたが、思いきって、よろいびつ

ことがわかりました。 ん。手をいれてさぐってみると、まったく、からっぽである 中はまっ暗ですが、なにもかくれているようすはありませ

ちゃんのかくしてあるような場所は、まったく見あたらない どの部屋にもかぎのかかった戸だななどは一つもなく、ルミ ある部屋、物置きのような部屋、 といっても、せまい西洋館なので、古くさいベッドのおいて え、ほかの部屋もくまなくさがしまわりました。ほかの部屋 のでした。 それから、小林君は、そのアトリエの中を十分しらべたう 台所などでぜんぶでした。

さがしにきたんだよ。もしいたら、安心してへんじをしなさ い。きみを助けにきたんだから……。」 「ルミちゃん……ルミちゃん……おとうさんにたのまれて、

えもありません。 そんなふうに、いくども呼んでみましたが、なんのてごた

老人の正体を見きわめてやろうと考えています。 したが、このまま立ちさる気はありません。怪老人がいつ帰 入口にかぎもかけないでおくはずがない。」 ってくるか、わからないのですから、どこかにかくれていて、 「やっぱり、ほかの場所へかくしたんだな。それでなければ、 小林君はそう思って、ルミちゃんをさがすのはあきらめま

すると、そのとき、入口のほうでバタンという音がして、

こつこつと廊下を歩く足音が聞こえてきました。怪老人が帰

服は、古ぼけた黒い背広のようです。

小林君は、すばやくアトリエにかけこんで、さっきのよろってきたのかもしれません。

箱の中の少女

まり、じぶんでふたをしめました。いびつに近づくと、重いふたを持ちあげて、その中にうずく

しすきまを作っておいたのです。顔を横にすれば、そこから手帳にはめてあった鉛筆を、ふたのあいだにはさんで、すこしかし、ピッタリしめてしまっては息ができませんので、

の中へはいってきました。(そうして、息をころして待っていますと、足音の主が、広間外をのぞくこともできます。)

へいきだぞ。ほら、ここにちゃんと、ろうそくというものがはないじゃないか。だが、電灯なんかつかなくても、おれはらい料金がたまったって、なにも電灯線を切ってしまうこと「電灯会社のやつ、いじの悪いまねをしやあがる。六ヵ月ぐ

めました。

びつの中までさしこんできました。音がしたかと思うと、あかちゃけたろうそくの光が、よろいしわがれた老人の声です。そして、シュッとマッチをする

フ.....。|

ある。これさえありゃ、べつに不自由はしないのさ。ウフフ

のすごい顔に見えます。で持っているので、下からの逆光線に照らされて、じつにも、やっぱり白ひげの老人です。それが、ろうそくを胸のへん、小林君は、顔を横にして、すきまからのぞいてみました。

目、大きな口、長い白ひげ、モジャモジャのしらが頭……。やせこけたほお、高いワシ鼻、太いまゆ、ギョロリとした

きな口で、にやりと笑いました。にくんくんいわせて、においをかいでいましたが、やがて大にのうすきみのわるいじいさんは、高いワシ鼻を、しきり

女だな。」 な。くんくん……たしかにそうだ。おしろいのにおいがする。「おやっ、へんだぞ。だれかここへはいってきたやつがある

少女にばけた小林君は、箱の中でギョッとして、首をちぢそういって、じろりと、よろいびつのほうを見ました。

ごとをはじめるぞ。ワハハハ……。」

「ワハハハ……うまいことを思いついたぞ。おれの知恵はどなにかを取りだすと、またこちらへやってきました。そして、なにかを取りだすと、またこちらへやってきました。そして、たきな口をいっぱいにひらいて、いきなり笑いだすのでした。大きな口をいっぱいにひらいて、いきなり笑いだすのでした。かつかないだろう。もうすこし、ようすをみてやろう。」がつかないだろう。もうすこし、ようすをみてやろう。」「さとられたかしら。でも、まさか、よろいびつの中とは気

それが下のほうから、ろうそくの光に照らされるのですから、そのあいだから、どす黒い舌が、へらへらとのぞくのです。びに大きな口がぱくぱく動いて、黄色い歯がむきだしになり、しいさんは、気ちがいのように笑っているのです。笑うた

-17-

その気味わるさといったらありません。

とをするんだろう。のんきらしく、彫刻でもはじめるつもり だろうか?」 「しごとをするといって、こいつは、いったい、どんなしご

右手に大きな金づちをさげていることがわかりました。 おも見つめていますと、怪老人は、左手にろうそくを持ち、 箱の中の小林君は、心の中でそんなことを考えながら、 な

うで、よたよたと、こちらへ歩いていきましたが、よろいび によろいびつにとびかかり、その上に腰をおろしてしまいま つから二メートルほどのところへ近づくと、パッと、一とび 老人は、背中をまるくして、まるでゴリラのようなかっこ

気がつかないほど、のろまだと思っていたのかね? おれの 聞こえるかね。ワハハハ……おれが、よろいびつのすきまに 目は、ネコの目だよ。どんな小さなものでも、見のがしっこ 「ワハハハ……しめたぞ。おい、中にいるやつ、おれの声 いのだ。 が

をうつ音だぜ。一 ごとさ。ほら、こうするのだ。聞こえるかね? これは、釘 釘と金づちのしごとさ。つまり、きさまをいけどりにするし たいなんのしごとだと思ったね? ワハハハ……それはね、 おれがしごとをするといったのを、聞いていたかね。いっ

ったので、ふたはピッタリしまっています。老人は、それを たの上にこしかけたとき、はさんであった鉛筆がおれてしま 長い釘をトントンとうちこみはじめました。さっき老人がふ 怪老人は、にくにくしくいいながら、よろいびつのふたに、

> 上から釘づけにしようとしているのです。 「ワハハハ……。中にかくれているのは、

女探偵とあっては、 の子にはやさしくするほうだが、 てしまうのだ!」 ね。女探偵かね。女のくせにだいたんなやつだ。おれは、 しょうちができない。こうして閉じこめ おれの秘密をさぐりにきた 若い女の子らしい

持っているのを見たとき、なぜ気がつかなかったのでしょう。 もすんだのです。 あのとき箱からとびだしてしまえば、こんなめにあわなくて 小林君は、しまったと思いました。さっき老人が金づちを

息がつまって死んでしまうばかりです。 こんながんじょうなよろいびつの中へ閉じこめられたら、

うさんに知らせるわよ。」 いと、お友だちがさがしにくるわよ。そして、 でいて、うっかりここへはいってきたのよ。あけて! でな 「あたし、探偵じゃないのよ。中学生なのよ。原っぱで遊ん 小林君は、ありったけの声をふりしぼって叫びました。 あたしのおと -18-

れないのでした。 小林君は、こんなさいにも、少女にばけていることをわす

うして釘をうってしまえば、 しかし、なにをいっているのか、すこしもわからないよ。こ 「ウフフフ……、なにかいってるね。やっぱり女の声だね。 いくら叫んでも、 もう聞こえや

そうしているうちにも、釘は二本、三本、四本と、みるみる じいさんが上に乗っかっているので、びくとも動きません。 小林君は、力をこめて、ふたをおしあげようとしましたが、

うちにうちこまれていくのです。

に釘づけにされてしまいました。叫びたてましたが、なんのかいもありません。ふたは、完全小林君は、全身の力をふるって、箱の中であばれまわり、

刀のきつさき

といいながら、部屋のすみからウイスキーのびんとコップを作ったがんじょうなよろいびつですから、ふたをしめると、作ったがんじょうなよろいびつですから、ふたをしめると、空気がまったくかよわなくなってしまうのです。空気がまったくかよわなくなってしまうのです。いや、それよいて、心臓がおそろしい早さでうっています。いや、それよいが株君は、あんまりあばれたので、のどがからからにかわ

ました。とうとう、このまま死んでしまうのかと思うと、残るの中の小林君は、だんだん息ぐるしさがひどくなってきちがいのように、とんきょうな声で笑いつづけるのです。の箱がびくともするものか。ワハハハ……。」かなか、しゅうねん深いぞ。だが、いくらあばれたって、こ「ワハハハ……まだあばれているな。女の子にしちゃあ、な

イスキーを、ちびりちびりと飲みはじめました。

持ってきて、よろいびつの上に、どっかりと腰をおろし、

ウ

念でたまりません。さすがの少年名探偵も、まっ暗な箱の中

で泣きだしたくなってきました。

だ。おい、おじょうさん、おれはいいことを思いついたぞ。「だが、待てよ。このままではおもしろくないぞ。ああそうわけのわからぬことを、しゃべりだしました。 もうすっかり、よっぱらってしまった老人は、またなにか、

待て待て、いま、きさまを楽にしてやるからな。ちょっとの

ッとして耳をすましました。 声が聞こえ、老人が立ちあがったようすなので、思わずギョー箱の中の小林君は、かすかに、「楽にしてやるぞ。」というそういって、じいさんは、よろよろと立ちあがりました。がまんだ。すぐ楽になるぞ。ワハハハ……。」

いついたのにちがいない。」きゅうには死なないから、なにか、もっと早く殺すことを思そうだ、きっとそうだ。ただ箱の中へ閉じこめただけでは、「もしや、あいつは、ぼくを殺すつもりじゃないかしら?「楽にしてやる。」とは、いったい、どういう意味でしょう。

まうような気がしました。 小林君は、そう思うと、ゾーッとして、心臓がとまってし

小林君の全身から、つめたい汗がにじみだしてきました。ピストルをうって、ぼくを殺すのじゃないかしら。」「ピストルじゃないかしら。あいつは、箱の外からいきなり

「あいつは気ちがいだ。あいつの目は、気ちがいの目だ。殺

人狂にちがいない。」

まがとびこんでくるのだと、かんねんしました。がして箱の横っぱらに穴があき、じぶんの胸へ、なまりのた、小林君は、もうかくごをきめました。いまにも、パンと音

「明智先生!」

そのかわりに、ごしごしと板をひっかくような音が、聞この音は、いつまでたっても聞こえないではありませんか。生の顔が、まぶたの中に、はっきり浮かんできました。思わず、なつかしい先生の名を呼びました。にこやかな先

えてきました。そして、そのたびに、よろいびつが、かすか

のだな!」
のだな!」
のだな!」
のだかのです。
いつのではないではなくて、刀だったのか。
のでのです。
のではない刃のきっさきで、板をごしごしこすっているのです。
と、するどい刃ものでしょう。刀かもしれません。むかこすっているのです。いや、穴をあけようとしているのです。

このよろいびつのような四角な箱の中へ、ひとりの少女が閉できました。ずっとまえに見た、奇術の舞台です。ちょうど、そのとき、小林君のまぶたの中に、ふしぎなものが浮かん

じこめられるのです。

す。そして奇術師は、この剣を一本一本、四方から箱の中へが、ピカピカ光る長い剣を、七一八本もかかえてあらわれまそこへ、西洋の魔法つかいのようなかっこうをした奇術師

つきとおすのです。

「あれだ。いまにぼくは、あれとそっくりのめに、あわされ見物人のたましいを、ゆすぶるように聞こえてくるのです。たように見えます。箱の中からは、少女のかなしい叫び声が、見物人には、箱の中の少女が、たくさんの剣でつき殺され

るのだ!」

もに胸をつきとおすにちがいないのです。るので、身をかわすすきまはありません。きっさきは、まとう。しかし、小林君のからだは、箱の中いっぱいになっていできます。やがて、するどいきっさきが、あらわれるでしょギリギリという刃ものの音は、だんだん箱の板にくいこん

暗くてよくはわかりませんが、刀のきっさきのようなものが、そのとき、ブツッと音がして、箱の板に穴があきました。に、かなしい叫び声をあげようかと思いました。 小林君は、もうたまらなくなって、あの奇術の少女のよう

いのです。いつまでたっても、なにごとも起こりません。思いました。ところが、ふしぎなことに、どこもいたくはなー小林君は、ハッとして目をつぶりました。もう殺されたとすぐ目の前にあらわれたのです。

ったようです。はいってくるわけです。気のせいか、いくらか、息が楽になうそくの光がさしこんでいました。むろん、そこから空気も目を開いてみると、板に大きな穴があいて、そこから、ろ

いと、寿 命をのばしてやったのさ。息がつまって死んでしまれると思ったのかね? ワハハハ……まだ殺さないよ。ちょ「ワハハハハ……おじょうさん、びっくりしているね。殺さ

やったのさ。どうだ、おれの声がよく聞こえるだろう?」っちゃあ、おもしろくないからね。息ぬきの穴をこしらえて

うのです。
聞こえます。酒くさい老人の息のにおいさえ、ただよってくいかにも、怪老人のしわがれ声が、いままでよりはっきり

赤いほのお

うの?」「ねえ、おじいさん、いったいあたしを、どうしようってい

が、答えました。して叫ぶのでした。すると、よっぱらいじいさんのわめき声して叫ぶのでした。すると、よっぱらいじいさんのわめき声、小林君は、あくまで女の声で、板の穴に口をよせるように

ハハハ……。|おまえの声が聞こえなくては、酒がうまくないからね。ワハおまえの声が聞こえなくては、酒がうまくないからね。ワハとはいわないよ。ただね、ちょっと酒のさかなにするまでさ。「ワハハハ……心配かね? なあに、おまえを取って食おう

から、いうことは、めちゃめちゃでした。ち気ちがいみたいなやつが、すっかり、よっぱらったのですす。そして、とほうもない笑い声をたてるのです。はじめか口飲んでは、わけのわからないことを、しゃべりちらすので舌なめずりをしながら、ウイスキーを飲みはじめました。一怪老人は、またよろいびつにこしかけて、ピチャピチャと、

怪老人は、それから三十分ほども、いいたいままの悪口をた。よっぱらいになにをいっても、むだだと思ったからです。「小林君は、ばかばかしくなって、口をつぐんでしまいまし

かきはじめたのです。つてきました。いびきです。箱にこしかけたまま、いびきをらなくなり、ことばのほかに、みょうな音がまじるようになたたいていましたが、そのうちに、だんだん、ろれつがまわ

)、 - 。 持っていたウイスキーのびんか、コップが、床に落ちたのでとつぜん、ガチャンとガラスのわれる音がしました。手に

ていました。りかえったアトリエの中に、老人のいびきの音だけがつづいりかえったアトリエの中に、老人のいびきの音だけがつづいからころがり落ちました。そして、あとは、しいんとしずままもなく、どしんと大きなひびきをたてて、怪老人が、箱

りったけの力をふるって、頭と肩で箱のふたをおしあげようったは、このまに逃げださなければと思いました。そして、あじいさんはとうとう、よいつぶれてしまったのです。小林

ましたが、いびきは、あいかわらず聞こえているのです。そているのに気がつきました。老人が目をさましたのかと思いはもう力がつきて、ぐったりとなってしまいました。なんどもなんども、ぶっつかっているうちに釘がゆるんで、しかし、がんじょうなよろいびつは、びくともしません。としました。

いつのまに、だれがはいってきたのでしょう。ごそごそと動老人のほかに、なにものかがいるのです。それにしても、

るものがあるのです。

のいびきにまじって、

もっとべつの、かすかな音をたててい

く音のほかに、かすかな息づかいさえ聞こえてくるではあり

と恐ろしいやつでしょうか。 いるのです。人間でしょうか。 つのなにものかがしのびこんで、こっそりと、なにかやって 小林君はゾーッとしました。アトリエの中へ、老人とはベ それとも、人間よりも、 もっ

足音も聞こえません。うす暗い部屋のすみに、じっと、うず そのかすかな音はやんでしまいましたが、べつに立ちさった くまっているのかもしれません。しかし、 じっと息をころして、聞き耳をたてていますと、やがて、 なんのために?

いるのです。

ああ、 きたやつに、声をかけようかとも思いましたが、もし怪老人 小林君は、どうしていいのかわかりません。しのびこんで いったいなんのために?

の仲間だったら、たいへんです。

せん。老人のいびきのほかは、しいんと、 いくら待っても、さっきのあやしい音は、 ためらっているうちに、時間がたっていきました。しかし、 もう聞こえてきま しずまりかえって

火の海

います。

ん。パチパチと、なにかがはぜるような音です。 気づきました。こんどは、人間が動いている音ではありませ んな気持です。 まっ暗なせまい箱の中で、じっとしているのは、じつにへ やがて、小林君はまた、きみょうなもの音に

です。

チという音は、火が燃えているのでしょうか。 た。もののこげるにおいです。では、あのかすかな、パチパ そのうちに、へんなにおいが箱の中までただよってきまし たしかにそうです。こげるにおいは、だんだん強く

> なってきました。 なってきました。パチパチとはぜる音は、いよいよはげしく

がはいこんできました。 そればかりではありません。箱の穴から、スーッと白い煙

ちろちろとまたたき、箱のまわりが、みょうに熱くなってき て箱の穴に、ろうそくの光とはちがった、ぶきみな赤い光が、 たではありませんか。火事です。アトリエが火につつまれて 煙はますますこくなり、むせっぽくなってきました。

す。 にものかがしのびこんできたようなもの音が、 ろうそくをたおして、その火が燃えうつったのでしょうか。 いや、そうではなさそうです。さっきのかすかなもの音、な どうして火事がおこったのでしょう。よっぱらいの老人が、 あやしいので

死にものぐるいの力で、 箱の中の小林君は、気ちがいのようにあばれだしました。 めちゃめちゃに、 もがきまわったの

や、こわれるよりもさきに、ふたにうちつけてあった釘がゆ ろいびつも、めりめりと音をたててこわれはじめました。い ものぐるいの力はおそろしいもので、さしもがんじょうなよ せん。めったむしょうに、あばれつづけているうちに、死に きました。しかし、そんなことにかまっているひまはありま 肩や、ひじや、ひざに、かすりきずができて、血が流 れて

いびつの中に立ちあがっていました。 るんで、パッとふたが開いたのです。そして小林君は、よろ

り、そのあいだから赤いほのおが、バッ、バッと音をたててとてんじょうをなめていました。床には黄色い煙がはいまわかなほのおが、何千ともしれぬ毒蛇の舌のように、めらめら煙がもうもうとうずまき、一方の壁は半分焼け落ちて、まっ見ると、あたりはいちめんの火の海でした。部屋じゅうに、

足も、あざ縄で、ぐるぐるまきにしばられているのです。ありません。いつのまにだれがしばったのか、老人は、手もよっぱらって、足が立たないのでしょうか。いや、そうではながら、ごろごろと、イモ虫のようにころげまわっています。老人はと見ると、その煙の中にたおれたまま、むせかえり

燃えあがっていました。

助けだしたところで、逃げられる心配はないのです。ません。それに、さいわい手足をしばられているのですから、いくら悪人でも、焼け死ぬのをほうっておくわけにはいき

いきなり町のほうへかけだすのでした。へだたった草の中へ老人を寝かせました。そして小林君は、廊下から入口のドアの外へ。そして、たてものから、ずっとまだ燃えていません。やっぱり老人の足をひきずったまま、いないところをえらびながら、部屋の外へ出ました。廊下は小林君は、力まかせに老人の足をひきずって、床の燃えて

小林君は、そこへとびこんでいきました。いていました。いていました。

いつのまにか日がくれて、

外はまっ暗になってい

ました。

呼びだし、知りあいの中村警部に、いそいで、ことのしだいまわして、火事の場所を知らせたあとで、警視庁の捜査課をと叫んでおいて、赤電話の受話器をとると、まず、一一九を「あのおばけやしきの西洋館が火事です!」

した。もうそのころには、近所の人たちが原っぱへ集まって君は、怪老人をころがしておいたところへ、とってかえしますぐに現場へいくという中村警部のへんじをきいて、小林中村警部の助けをもとめるほかはなかったのです。

をつげました。明智探偵は旅行中なのですから、さしずめ、

きて、いっぱいの人だかりになっていました。

たおれています。はかいていません。けれど、ぐったりと死んだようになって、怪老人は、もとの場所にころがっていました。もういびき

ように、あれくるっていました。つたい、やねにはいあがり、やみの空にのぼろうとでもするまれていました。何千何万ともしれない赤いヘビが、のきをそのときはもう、西洋館ぜんたいがまっかなほのおにつつ

いに火がまわってしまったからです。したが、もう西洋館を助けることはできません。建物ぜんたえくるう西洋館に、ふんすいのように水がそそぎかけられま車がやってきました。たちまちホースが何本ものばされ、燃車のとき、するどいサイレンの音をひびかせて、消防自動

がる黄色い毒煙を、右に左にあおっていました。な風が、そのへんいったいを、くるいまわり、もくもくと上にいろどられていました。そして、えたいのしれないぶきみ善西洋館をかこむ木立ちは、絵のぐをぬったように、まっか

-23-

声が聞こえてきました。ほのおにたわむれる怪鳥のなき声で ずまく煙の中から、材木のはぜわれる音にまじって、異様な ないのです。それは、気ちがいのような人間の笑い声でした。 しょうか。いやいや、そうではありません。鳥が笑うはずは そのとき、じつにふしぎなことが起こったのです。そのう

ろこぶように、笑いくるっていたのです。 ああ、こののろわれた笑い声には、いったい、どういうい

ほのおと煙のむこうがわから、なにものかが、人の不幸をよ

みがあったのでしょうか。

きみょうな問答

けさせられていたのです。 署長と、警視庁の中村警部と、二―三人の刑事たちにとりま かれていました。老人は、手足の縄をとかれ、木のいすにか その夜ふけ、赤堀鉄州老人は、杉並警察署のしらべ室で、

んなの顔を見まわしていました。 につままれたような、とんきょうな顔で、キョロキョロとみ 酒のよいもさめて正気にかえった怪老人は、まるでキツネ

かすようにいいました。 どうしてじぶんの家へ火をつけたんだ?」 「きみのうちは、すっかり燃えてしまったんだぞ。 杉並署の部長刑事が、 老人の顔をのぞきこみながら、 いったい、 おど

て、ころがされていた。だが、どうして助かったのだろう。 おれは焼き殺されるところだった。おれはだれかにしばられ 「火をつけた? そんなばかなことが。……あっ、そうだ。

鉄州という、このきみょうな老人は、ほんとうに、

少女の身

どうも、しらばっくれているのではなさそうでした。赤堀

のうえを心配しているようでした。

くれたんだ。」 あっ、そうだ。だれかがおれの足をひっぱって、助けだして っていたんだぞ。」 「そうとも。ほうっておいたら、きみはいまごろ黒こげにな

きな目が、とびだすほど見ひらかれ、 した。青ざめていた顔がいっそう灰色になって、ぶきみな大 それを聞くと、怪老人の顔に、 異様な恐怖の色が浮か 鼻のあたまに、びっし

ょり汗がわいてきました。 いた。おれは人を殺してしまった!」 「いけないっ! たいへんだっ! おれはすっかりわすれて

たというのだ。」 「おい、しっかりしろ。なにをいっているんだ。だれを殺し 老人は、わけのわからないことをわめきだしました。

だれかはこびだしてくれたのか。きみ、そいつをしらべてく おれはたいへんなことをしてしまった。え、きみ、どうだっ 火事場のあとに、人間の死体が見つからなかったか?のああ、 女の子は、よろいびつに閉じこめたままだ。おい、きみたち、 れなくしてしまったのだ。そしておれは酒を飲んだ。ずいぶ よろいびつの中にかくれていたので、上から釘をうって出ら た? 死体はなかったか? それとも、あのよろいびつを、 ん飲んだ。なにがなんだかわからなくなってしまった。あの 「女だ。かわいい女の子だ。おれのアトリエへしのびこんで、 [°] ああ、たいへんなことになったぞ。

の子は、ちゃんとここにいる。さあ、よく見るがいい。」 「ハハハ……安心しろ! きみがよろいびつに閉じこめた女

だ。空巣ねらいだ。そうでなくて、よろいびつなんかに、か けてくれっ!」 くれるはずがない。きみたち、こいつをつかまえて、縄をか きみたち、こいつはどろぼうだぞ! おれの家へしのびこん て助かったのだ。……だが、待てよ。あっ、いけない。おい、 女姿の小林少年を呼びだして、老人の前に立たせました。 「あっ、そうだ。この子だ。ふしぎだなあ。おまえはどうし 部長刑事はそういって、みんなのうしろに立っていた、少

開きました。 めきたてました。それを見ると、中村警部が、はじめて口を 怪老人は、そばに立っていた刑事にむしゃぶりついて、わ

名な私立探偵だよ。」 「なにをいっているのだ。この子は、どろぼうどころか、有 「なにっ、こんな小さな女の子が、私立探偵だって?」

これは、ほんとうは男の子なんだよ。名探偵明智小五郎の有 「小林君、かつらをとって、すがおを見せてやりたまえ……。 怪老人の大きな目が、またとびだすほど見ひらかれました。

にしても、きみはなぜ、おれのアトリエへしのびこんだのだ。 る。そういえば、新聞の写真とそっくりの顔だ。だが、それ いる。小林という少年助手のことは、新聞で読んで知ってい ると、その下から、少年の頭があらわれたではありませんか。 名な少年助手、小林芳雄君だよ。」 「あっ、それじゃ、きみは男の子だったのか。うん、知って 小林少年は、すっぽりと、かつらをとって見せました。す

しかも、女の子にばけたりして……。」

ば、こんなことを、 ルミちゃんをさらって、身のしろ金をゆすった本人だとすれ どうも、ようすがおかしいのです。もしこの老人が、甲野 ぬけぬけといえるはずがないではありま

怪老人の正体

せんか。

聞いて、なにもかも知っているのです。 かくすわけにはいきません。中村警部にすっかり話してしま らせないようにといわれていましたが、もうこうなったら、 いました。杉並署の署長や部長刑事も、 それからまた、部長刑事と怪老人の問答がつづきました。 小林君は、甲野さんから、ルミちゃんの事件は、警察に知 中村警部からそれを

「きみは、赤堀鉄州という人形師だね。」

「そうだよ。おれはおばけ人形をつくる名人だよ。」 部長刑事が、怪老人をにらみつけてたずねました。

「赤坂の甲野光雄という金持ちを、知っているだろう?」

う。 めの、ルミちゃんという、かわいい女の子を、さらっただろ 「ふうん、聞いたような名だが、べつに知りあいではないね。」 「まだしらばっくれているな。きみは、その甲野さんのむす

「さらった? おれがかね。」

に入れて、甲野さんの家へ、運送屋にとどけさせただろう。」 「そうだよ。そして、ルミちゃんとそっくりの人形を木の箱 それを聞くと、赤堀老人は、びっくりしたように目をむき

ました。

送店の店員だ。その店員は、たしかに赤堀鉄州という人形師 「とんでもない、おれは、そんなこと、まるで知らないよ。」 「だが、こちらには、ちゃんと証人があるんだぜ。木の宮運

を見れば、おれか、おれでないか、すぐにわかることだ。」 「それじゃあ、その店員にあわせてもらいたいもんだね。 顔

木箱をはこんだといっている。」

にたのまれて、

芝居らしくないので、 老人のびっくりしたようすが、 中村警部と署長は、いぶかしげに顔を 真にせまっていて、どうも

見あわせました。

まえ。」 いだに、ルミちゃんの事件を、このじいさんに話してやりた 「それじゃ、木の宮の店員を呼びだすことにしよう。 その あ

すってきたこと、運送屋がルミちゃん人形をとどけたこと、 話してきかせました。 の子に変装して、そこへしのびこんだことなどを、 小林少年が、運送屋から赤堀老人の西洋館をききだして、女 んがさらわれたことから、電話で一千万円の身のしろ金をゆ 送店へ出かけていくのでした。部長刑事は、公園でルミちゃ 署長 が部 長刑事に命じました。そして、 ひとりの 刑 すっかり 事 が運

よろいびつにかくれていたわけがわかりましたよ。そうとは 知らぬものですから、 「うーん、そういうわけだったのですか。それで、女の子が あんなひどいめにあわせてごめんなさ

ている小林少年に、すまないという顔をして見せるのでした。 老人はにわかに、 ていねいなことばになって、そこに立っ

> ょ。」 あして、よろいびつに閉じこめて、あとで警察へひきわたす てください。まったくどろぼうだと思いこんでいたので、 くれたのですね。どうもすまんことをしました。かんべんし ばかりになっていたわしを、きみが、火事場から救いだして つもりだったのです。きみ、どうか、かんべんしてください 「いや。そればかりじゃない。手足をしばられて、焼け死ぬ

みました。 うしても、 が、みょうにおどけた、こっけいな感じにかわってきました。 アトリエでろうそくの光をうけて、恐ろしい悪人にみえた顔 そういって、いかにもはずかしそうにしているのを見ると、 小林君は、なんだか老人がかわいそうになりましたが、ど たしかめたいことがあったので、それをたずねて

だせませんか。」 をしばったわけではないでしょう。だれがしばったのか思い でしばられていた。ぼくは、よろいびつの中にいたので、だ れがしばったかわからないのです。 アトリエが火事になったとき、あんたは、よいつぶれたまま縄 「そういえば、ぼくにも、ふにおちないことがあるんですよ。 まさかじぶんで、じぶん

いのです。寝ている間に、 「じつにだらしのない話だが、わしは、なにもおぼえていな すると、老人は頭をかいて、

だれ

かにしばられてしまったので

す。 といったまま、考えこんでしまいました。

をつれてはいってきました。 そのとき、さっき出ていった刑事が、 木の宮運送店の店員

ね。 「きみにあの木箱の配達をたのんだのは、この人ではないか

の人とはちがいます。」 「ちがいます。やっぱり白いひげをはやしていましたが、こ 部長刑事が、店員を老人の前に呼んでたずねました。

「だが、赤堀鉄州という人形師は、この人だよ。きみの店へ 店員は、一目見て、きっぱりといいきりました。

配達をたのんだのも、 「そうです。名まえはそうでしたが、そのときの人は、この 赤堀鉄州だったね。」

人じゃありません。」 これで、赤堀老人のうたがいがはれたわけです。

ですよ。」 「待ってくださいよ。これには、なにか深いわけがありそう しきりに首をふりながら、ゆっくりしゃべりはじ

めました。 「まあ、聞いてください。そのルミちゃんとかの人形を送っ 老人は、

き殺そうとしたのです。 せておいて、ほんとうのことがわからないうちに、 まえをかたったのです。そして犯人はこのわしだと思いこま たのは、むろん、わしではありません。そいつは、わしの名 わしを焼

ことになって、じぶんには、うたがいがかからない。 死んでしまえば、死人に口なしで、わしが犯人だったという のです。そうだ。それにちがいない。そうして、わしが焼け ごきができぬようにしばっておいて、アトリエに火をつけた そいつは、わしがよいつぶれていたのをさいわいに、身う ちくし

ょうめ、うまく考えやがったな。」

だことになれば、身のしろ金が取れないじゃないか。」

のところへ取りにくるといっているんだぜ。いま犯人が死ん

「待ちたまえ。犯人は、あすの晩、身のしろ金を、甲野さん

部長刑事が、よこやりを入れました。

たってから、さもじぶんがみつけたような顔をして、甲野さ いのだから、その子をだいじにかくしておいて、すこし日が かもしれん。ルミちゃんという女の子はまだ発見されていな 「うーん。それもそうだが、そこにはまた、べつのてがある

くまいが、そうとうの金をせしめることができる。どうです、 きっと懸賞金がついていますよ。一千万円というわけにはい んのところへつれていくというてもある。そのじぶんには、

いろなやりかたがあります。犯人と思いこまれたわしが死ん いや、ルミちゃんさえかくしておけば、ほかにまだ、いろ

この考えは?

うでも、いろいろなてが考えだせるというものです。」 これはたいへんなさわぎになりますよ。そこで、真犯人のほ でしまって、ルミちゃんのかくし場所がわからないとなると、

似ていたので、かえだまにつかわれたというわけだね。 犯人の心あたりがありそうだね。 れば、同じ人形師のなかまのことだから、きみには、その真 「すると、きみが白ひげをはやした人形師で、真犯人とよく 老人は、とくいらしく、しゃべりつづけるのでした。 きみとよく似た人形師とい とす

えば、いったいだれだろうね。」 つにふしぎですよ。しかし、わしも、そいつに焼き殺されか 「ところが、そういう心あたりは、まったくないのです。じ 部長刑事がたずねますと、赤堀老人は首をふって、

-27-

お目にかける。ねえ、小林君、どうかわしを先生にひきあわあわせて、真犯人をさがしだします。きっと、さがしだしてか。わしは先生に弟子入りしますよ。そうして、警察と力をえ、小林君。わしをひとつ、明智先生に紹介してくださらんけたのですから、なんとしても、かたきがうちたい……。ね

老人は、しんけんになって小林少年にたのむのでした。

せてください。」

たルミちゃんが、いつのまにか、家へ帰っていたのです。すやすや眠っていたではありませんか。ゆくえの知れなかっにげなくはいってみますと、ベッドの上に、ルミちゃんが、ぎがおこっていました。女中さんが、ルミちゃんの寝室へなさて、よく日の朝のことです。甲野さんの家では、大さわ

ルミちゃんのおとうさんの甲野さんは、そのとき、やっとのかが、ルミちゃんをねむり薬で眠らせておいて、夜のうちと、ねむり薬を飲まされていることがわかりました。なにもさましません。いそいでお医者さまを呼んで見てもらいますけつけてきましたが、ルミちゃんは、いくら起こしても目を女中さんの知らせで、おとうさんやおかあさんが寝室へか

へ入れておいた、たくさんの札たばが、すっかりなくなってああ、やっぱりそうでした。机の右がわの三つのひきだし

てみました。気がついて、

いそいで書斎へいって、机のひきだしをしらべ

して、一千万円の札たばを持っていってしまったのです。いたのです。あの怪老人は、約束のとおりルミちゃんをかえ

怪老人は、早くもどこかへ、姿をくらましたあとでした。とうとう、あの西洋館を見つけだしましたが、そのときには、さめたルミちゃんに聞きただし、怪老人の住みかをさがして、とどけました。すると、すぐに警官がやってきて、眠りから甲野さんは小林少年と相談したうえで、このことを警察に

す。 なって、その西洋館は、がらんとした空家になっていたのでたくさんの人形も、ふり袖姿の紅子さんも、みんないなく

;

ですから、怪老人が、また、なにか悪だくみをするまでは、しかし、ルミちゃんが帰って、ともかく事件はおわったの帰って、小林君に、くわしい話を聞きました。いれったのません。明智探偵は、事件の四日あとに大阪から察は、怪老人の捜索をつづけていましたが、なんの手がかり不れから一月ほどは、なにごともなくすぎさりました。警

ていました。 からーキロほどのやしき町に、りっぱな西洋館の邸宅を持っからーキロほどのやしき町に、りっぱな西洋館の邸宅を持っさんの家に、みょうなことがおこっていました。 ところが、その一月ほどたったある日のこと、渋谷区の神山手がかりのつかみようがないのです。

りが、いまサナエちゃんの部屋で、なにかいいあらそっていナエちゃんという、ふたりのこどもがありました。そのふた神山さんには、中学一年生の進一君と、小学校五年生のサ

-2

るのです。

していると、いまにおまえも人形になっちゃうぞ!」「サナエの人形きちがい!」そんなに人形ばっかりだいじに

進一君が、妹をからかいました。

しの味方だから、にいさんなんか、いくらいじめたってへい「いいわよ、にいさんのいじわる!」この人形がみんなあた

きよ!」

とあらゆる人形が飾ってあるのです。には、壁いっぱいのガラス戸だながあって、その中に、あり人形きちがいといわれるのも、もっともでした。その部屋

ャウジャならんでいます。いろいろの地方の人形が、こけし人形をはじめとして、ウジいろいろの地方の人形が、こけし人形をはじめとして、ウジいつのまにか、こんなにたまってしまったのです。まらなくなっては、おねだりをして買ってもらった人形が、まりなくなっては、おねだりをして買ってもらった人形が、

にいさんの進一君は、サナエちゃんがそんなにたくさん人のボット人形まで、かずかぎりもなくならんでいるのです。ちゃんと同じくらいの大きさの西洋の少女人形、電気で動く人形。もっと大きいのでは、文楽人形のおひめさま、サナエミルクを飲む人形、寝かすと、「おぎゃあ。」となく赤ちゃんイタリアの大理石人形、京都できのかわいいさんぱち人形、マンス人形、目の青い西洋人形、船長のおじさんにもらったすこし大きいのでは、かぶき人形、なよなよとした姿の口すこし大きいのでは、かぶき人形、なよなよとした姿の口

形きちがい。」なんてからかうのです。 人形なんか集めるわけにはいきませんから、負けおしみで「人形を持っているのが、うらやましいのです。でも、男の子が

たこともないくせに!」の弟子だなんて、いばっているんですもの。明智探偵にあっ「にいさんだって、探偵きちがいだわ。名探偵、明智小五郎

ワーイ、ざまをみろ!」 ろ! これを持っているのが少年探偵団員の証拠じゃないか、のぼくらだって弟子なんだよ。ほら、このB・Dバッジを見だからね。団長の小林さんは、明智先生の弟子だから、団員るよ。話をしたこともあるんだよ。ぼくは少年探偵団の団員「なんだと? なまいきいうな。明智先生には二度もあって

そのとき、ドアが開いて女中さんが顔を出しました。ナエちゃんの鼻の先へつきつけて見せるのでした。ひとにぎりとりだして、ジャラジャラと音をさせながら、サ進一君は、ポケットから、ピカピカ光ったB・Dバッジを

うんなさい。」よ。おくさまが、その人と話していらっしゃるの。いってごよ。おくさまが、その人と話していらっしゃるの。いってごしい人形を売りにきたらしいのです。それはすばらしい人形「サナエちゃん、玄関へ、へんな人がきましたよ。大きな美「サナエちゃん、玄関へ、へんな人がきましたよ。大きな美

きました。からとびあがると、ばたばたと、玄関のほうへかけだしていからとびあがると、ばたばたと、玄関のほうへかけだしてい人形と聞くとサナエちゃんは、もう夢中です。パッといす

じぶんもじっとしていられなくなって、サナエちゃんのあと進一君は、あきれたようにつぶやきましたが、そのくせ、「ほんとうに人形むすめだなあ!(ぼく、たまげたよ。」

-29

から、のこのことついていくのでした。

あやしい男

いました。おかあさんが、すみのほうから、あきれたようにい男が、目もさめるような、美しい女の人形をだいて立っていってみますと、玄関のホールの板の間に、やせた背の高

ぴく動くのです。 ねた黒いひげがはえていて、ものをいうたびに、それがぴく気味のわるいほどまっ黒です。高いワシ鼻の下に、ぴんとは男は黒い服を着ていました。まん中からわけた髪の毛が、

ながら話しかけました。
サナエちゃんが出てきたのを見ると、男は、にやにや笑い見れば見るほどわからなくなるような、気味のわるい男です。何本も横じわがきざまれています。若いのか、年よりなのか、みょうにキラキラ光る目、さかだったまゆげ。ひたいには、

ょうか。」

は、ちょうどよろしいですよ。この人形はね、のおねえさまに、ちょうどよろしいですよ。この人形はね、らんなさい。まるで生きてるようじゃありませんか。あなたこんなりっぱな人形はありますまい。え? どうです? ごすきでしょう。人形をどっさりお持ちですってね。しかし、おじさんは、ちゃんと知っていますよ。あなたは人形がだい「ああ、そこへおいでになったのは、おじょうさまですね。

男は、だいていた人形をじぶんの前に立たせ、うしろから、

こ。両手を人形のわきの下に入れて、おどりをおどらせるのでし

す。おどりにつれて、顔も動き、こちらを見て、にっこり笑させて、おどっているのです。ほんとうに生きているようでめ、うっとりするような、かわいらしい顔をしていました。ざりをつけ、はでなゆうぜんのふり袖に、きんらんの帯をし人形は十五一六の美しいむすめさんでした。きれいな髪か

す。して、まるで、生きた人間がおどっているように見えるのでして、まるで、生きた人間がおどっているように見えるのでと、よくにているのです。いや、あれよりももっといきいき人形を見にいったことがあります。あの文楽の人形のおどりサナエちゃんは、いつかおとうさんにつれられて、文楽のサナエちゃんは、いつかおとうさんにつれられて、文楽の

ったように思われました。

「おかあさま、あれ売りにきたの?」

おかあさんを見あげました。サナエちゃんは、もう、ほしくてたまらないという顔で、

「あたし、ほしい「ええ、そうよ。」

わ。」「あたし、ほしいわ。こんなすばらしい人形、見たことない「あたし、ほしいわ。こんなすばらしい人形、見たことない

ると、 すると男は、早くもそれを聞きつけて、おどりの手をとめ

打ちはありますよ。おくさま、いかがです。おじょうさまが、人形が、たった一万円なのです。衣装だけでも、三万円の値だりなさい。きっと買ってくださいますよ。こんなりっぱな「おじょうさま、お気にいりましたか? おかあさまにおね

あんなにほしそうにしていらっしゃるじゃありませんか。」

の着物に、ほんもののきんらんの帯をしめているのですから、 一万円とは、おそろしく安いねだんです。 十五一六歳のむすめと同じ大きさで、ほんもののゆうぜん

「では、おとうさまにおたのみしてあげましょう。」

きにもどってきて、その人形を買いとることにしました。 おかあさんは、そういって奥へはいっていきましたが、じ

「おじょうさまのお部屋まで、持ってまいりましょう。そし

て、おじょうさまのお集めになった人形を、拝見したいもの

でございます。」

男はそういって、また、にやりと笑いました。

して、じぶんの部屋へいそぐのでした。 う夢中です。気味のわるさもわすれて、その異様な男を案内 サナエちゃんは、人形が手にはいることになったので、も

じぶんの持ってきたユリ子人形を長いすにかけさせ、おかあ さんから代金をうけとると、いくどもおじぎをして帰ってい 部屋にはいると、男はガラス戸だなの中の人形たちを見て、

きました。

ほどでした。 とさしむかいになると、三十分ほども身動きもしないで、じ っと人形を見つめていました。うれしさに、気がとおくなる サナエちゃんは、みんなが部屋を出ていって、ユリ子人形

「ユリ子ねえちゃま!」 やがてサナエちゃんは、ふと人形に呼びかけました。

ました。きっと、聞こえたのにちがいありません。 長いすにかけている人形の目がこちらを見たように思われ

> 「あたし、ねえちゃまが好きよ。好きで好きでたまらないわ。」 サナエちゃんは涙ぐんでいました。

涙でかすんだ目で、じっと見つめていますと、ユリ子人形

がにこやかに笑って、「さあ、だっこしてあげますから、いら っしゃい。」といっているように見えました。

「おねえちゃま!」

した。 サナエちゃんはそう叫んで、人形の胸にとびついていきま

深夜の怪

形に夢中になって、ほんとうに気でもちがうのではないかと、 から三日ほどたったのですが、サナエちゃんが、あんまり人 進一君は、なんだか心配になってきました。人形を買って

気づかわれたからです。

魔みたいな顔をしていました。ひょっとしたら、魔法つかい いち、売りにきた男が気にいりません。あいつは、西洋の悪 進一君は、どうもあの人形はあやしいと思いました。だい

法にかかっているからでしょう。 人形です。サナエちゃんがあんなに夢中になるのも、その魔 かもしれません。魔法つかいの持ってきた人形なら、魔法の

さましました。 その晩進一君は、 恐ろしい夢を見て、真夜中に、ふと目を

ことが起こっているような気がして、しかたがないのです。 なんだか、へんな感じがします。どこかで、とほうもない

ひょっとしたら、サナエちゃんがどうかしたのではないかと、

心配になってきました。

て、隣の部屋の前にしのびより、そっとドアをあけてみましをきました。そして廊下に出ると、足音を立てないようにし進一君は、ベッドから出て、手早くまくらもとにあった服

こつこつという音が聞こえてきました。んの寝室にもどろうとしていますと、どこからか、かすかに、あたそっとドアをしめて、廊下に出ました。そして、じぶ心配したようなことは、なにも起こっていなかったのです。サナエちゃんは、ベッドの上で、すやすやと寝ています。

たちどまって、じっと耳をすましました。

それともちがいます。もないのです。ネズミが、板をかじっているのでしょうか。ん。水道の水がしたたっている音かと思いましたが、そうでしスリッパが、こつ、こつという音をたてるはずはありませこつ、こつ、こつ。だれかが歩いているのでしょうか。しか廊下のまがり角のむこうから聞こえてくるようです。こつ、

感じです。ただごとではありません。魔性のものが近づいてくるようなただごとではありません。魔性のものが近づいてくるような、進一君は、なんだか胸がどきどきしてきました。どうも、

す。人形の目ではなくて、人間の目です。

です。たしかにその音は、まがり角のむこうから聞こえてくるようたしかにその音は、まがり角のむこうから聞こえてくるよう、足音をしのばせて、廊下のまがり角までいってみました。

うす暗い廊下のむこうから、パッと巨大な花がひらいたよっとのぞいてみました。 進一君は、からだをかくして、かたっぽうの目だけで、そ

り逃げだしたのです。

進一君は、ギョッとして、からだがしびれたように動かなうな美しいものが、こちらへ歩いてきます。

められないのです。くなってしまいました。顔をひっこめようとしても、ひっこくなってしまいました。顔をひっこめようとしても、ひっこ

のです。んの帯のあの美しい人形が、こつ、こつ、こつと歩いてくるんの帯のあの美しい人形が、こつ、こつ、こつと歩いてくるくれは、ユリ子人形でした。ゆうぜんのふり袖に、きんら

とができないのです。と思っても、からだがいうことをききません。ひっこめるこ「早く顔をひっこめなければ、あいてに気づかれる。」

「あっ、気づいたな!」

が、まるで、ヘビのようにぶきみです。たしかに生きた目でも、なんという恐ろしい目でしょう。あの美しい顔の目だけ出る光線が、空中でぶつかりあっているのです。それにしてぶん出ている進一君の顔を、穴のあくほど見つめています。ジーッとこちらを見つめています。まがり角の壁から、はんジーッとです。たしかに気づいたのです。人形は立ちどまって、

うとう人形は、クルッとむこうをむきました。そしていきなは、生きていることを見つかったという弱みがあります。としかし、このにらみあいは、人形の負けでした。あいてにた。なくなってきました。いまにも気をうしないそうでしたまらなくなってきました。いまにも気をうしないそうでしたま一君は、この恐ろしいやつと、にらみあっているのが、

22

こちらが勝ったとわかると勇気がわいてきました。進一君

は人形の後を追っかけるのでした。

屋です。あのたくさんの人形がならべてある部屋です。した。サナエちゃんの部屋です。寝室ではなくて、昼間の部人形は、むこうの部屋のドアを開いて、その中へかくれま

のです。はかかっていません。人形が、かぎを持っているはずもないぴったりしまっています。とってをまわしてみました。かぎ逝一君は、その部屋のドアの前にかけよりました。ドアは

こんでいきました。 思いきって、ドアを開きました。そして、部屋の中へとび

もう生きてはいませんでした。その顔をじっとみつめました。ふしぎ! ふしぎ! 人形は、ユリ子人形は、長いすに腰をかけていました。進一君は、

これはどうしたことでしょう。した。やっぱりこちこちした人形の手です。ああ、いったい、てみました。こちこちした人形の顔です。手にさわってみまんのてごたえもなく、ぐらぐらするばかりです。顔にさわっゆうぜんの着物の肩をおさえて、ゆすぶってみました。な

ました。めているうちに、心のそこから、ゾーッと恐ろしくなってきめているうちに、心のそこから、ゾーッと恐ろしくなってき進一君は、命のなくなった人形の美しい顔を、じっと見つ

ほのおの宝冠

そのあくる日、進一君は、おとうさんに夕べのことを話し

ましたが、おとうさんは、

て、とんでもない思いちがいをしたのだろう。」「そんなばかなことがあるもんか。おまえはきっと、寝ぼけ

と、てんでとりあってくださいません。

まったく考えられないことでした。らしらべても、ほんとうの人形で、これが動きだすなんて、ふたりでそこへはいってユリ子人形をしらべましたが、いくはりますと、「それじゃあ、人形部屋へいってみよう。」と、進一君が、それでも、「ぼく、たしかに見たんだ。」といい

きりわかったのです。れもよくしらべましたが、なんのしかけもないことが、はっおなかの中に機械じかけのある自動人形ではないかと、そ

さんをよびました。 神山さんは、ひとりで奥の居間にはいると、そこへおかあめいにいいはるものですから、すこし心配になってきました。ないのでした。おとうさんの神山さんも、進一君が一生けんしかし進一君は、夕べ寝ぼけていたとは、どうしても思え

です。その金庫の中に、神山さんのだいじな宝物がしまってあるのその金庫の中に、神山さんのだいじな宝物がしまってあるのくの居間の床の間のよこに、大きな金庫がすえてあります。

らいない。 い人形だとすると、この金庫の中の宝物をねらっているのか「そんなばかなことがあるはずはないが、もしあれがあやし

ってきたのです。かを、たしかめてみなければ安心ができないような気持にないとそんなことを考えると、宝物が金庫の中にあるかどう

-33-

ら宝物をとりだしてみました。 それでおかあさんをよんで、ふたりきりで、そっと金庫か

の上において、しずかにふたを開きました。 大きな四角い、皮の箱です。神山さんは、それをちゃぶ台

うな宝冠が、さんぜんとかがやいていました。 すると、皮箱の中のビロードの台座の上に、目もくらむよ

みにくるなんて、ばかなことがあるはずはないのだ。一のに、ああ、やっぱりわしの思いすごしだった。人形がこれを盗

申コニスは、これ、ここのごのこことに、このみにくるなんて、ばかなことがあるはずはないのだ。」

神山さんは、安心したようにつぶやきました。

まった。「まあ、いつ見ても美しいこと!」でも、ぶじでようござい「まあ、いつ見ても美しいこと!」でも、ぶじでようござい

おろすのでした。おかあさんも、うっとりと宝物をながめながら、胸をなで

おの宝冠」と名づけられていました。が燃えたっているように見えるので、だれいうとなく、「ほのそのほかいろいろの宝石がちりばめてあって、五色のほのお物であった、黄金の「冠」でした。ダイヤモンドやルビーや、ら買いいれた、むかしヨーロッパのある国の女王さまの持ち、それは神山さんが、ついこのごろ、ある外国の宝石商会か

のです。と思って、自分の家の金庫の中へ、たいせつにしまっていると思って、自分の家の金庫の中へ、たいせつにしまっている神山さんは、こんなりっぱなものを店へおいてはあぶない

神山さんは、そういって、しばらく考えていましたが、を開くことができないのだからね。」う。そうすれば、おまえとわしのほかには、だれもこの金庫「しかし、念のために、金庫のダイヤルの暗号をかえておこ

さんたちは、すこしもそれに気づかなかったのです。そのとき、障子の外で、かすかなもの音がしましたが、神山びらを閉めると、ダイヤルをまわして暗号をかえるのでした。といって、皮箱のふたをしめ、それを金庫の中にもどし、との名だから、わしもおまえも、わすれるはずがないからね。」「そうだ、サナエという暗号にかえよう。これなら、むすめ

のです。 屋をぬけ出して、こんな遠い部屋まで立ちぎきにやってきたしらべても人形としか見えなかったのに、またしても人形部ああ、やっぱりユリ子人形は生きていたのです。あれほど障子の外には、ユリ子人形が立ちぎきをしていました。

人形を売りにきた、あの西洋悪魔のようなやつが、遠くからには、なにか秘密があるはずです。ひょっとしたら、ユリ子心配もなく、人形部屋へもどることができました。ユリ子人形は立ちぎきをしてしまうと、だれに気づかれるいて、広い家の中が、からっぽになっていたのです。校へいっていますし、女中さんたちは、台所やせんたく場にそれはまだお昼まえでしたが、進一君とサナエちゃんは学

少女探偵

魔法をつかっているのではないでしょうか。

少年探偵団長の小林君に相談をするためです。のアパートへいきました。そこの明智探偵事務所をたずねて、進一少年は、中学校の帰りに電車にのって、千代田区の麹 町

ることは、どうしてもできないので、団長の小林少年の知恵進一君は、夕べのふしぎなできごとを、夢だったといいき

かりようとしたのです。

をしていました。どこかへ出かけていて、少女助手のマユミさんが、るすばんどこかへ出かけていて、少女助手のマユミさんが、るすばんところが、事務所へいってみると、明智探偵も小林少年も、

えさま」とあがめられ、したしまれていました。八歳のむすめさんで、少年探偵団員たちから、「探偵団のおねマユミさんは、一年ほどまえに明智探偵の助手になった十

もう、どんな男にも負けないほどの、すばしっこい、冒険ずいました。あの事件で、知恵もからだも、きたえられたので、その事件もおわって、いまでは、勇敢な少女名探偵になって(この全集三十七巻)のために恐ろしい目にあいましたが、マユミさんは、探偵助手になるとまもなく、「妖人ゴング」

きな女探偵になっていました。

ことがわかりました。名古屋方面へ出かけて、あさってでなければ帰らないというとたずねますと、明智先生といっしょに、ある事件のためにすこしも気がねはありません。小林団長はどこへいったのか進一君は、この「探偵団のおねえさま」と仲よしなので、

ぼくは、夢だとは思えないのです。たしかに、起きていたん「ぼくのおとうさんも、夢を見たんだろうというんだけれど、「おかしいわね。あなた、ほんとうに夢を見たんじゃないの?」りマユミさんに話して、どうすればいいかと相談をしました。それではというので、進一君は夕べのできごとを、すっか

んだかそんなふうに思われるわ。」
んと、なにか関係があるんじゃないかしら。あたしには、ないるんだわ。神山さん(進一君のこと)は、人形じいさんのみたいな顔の人が、あやしいわ。きっと、なにかたくらんでみたいな顔の人が、あやしいわ。きっと、なにかたくらんで「なにか秘密があるのね。その人形を売りにきた、西洋悪魔

進一君はひどく心配になってきました。じゃないでしょうか?」「そうでしょうか。そうすると、妹のサナエがさらわれるん

「ああ、そういえば、西洋の女王さまの宝冠があるんです。るようなものが、あるんじゃないの?」しれないわ。あなたのうちに、なにか、どろぼうにねらわれ「そうともきめられないわね。もっとほかに目的があるかも

マユミさんは、そういってしばらく考えていましたが、れか少年探偵団の人を電話でよんで、相談してみましょう。」そんなとりこしぐろうばかりしていてもしかたがないわ。だて、うちの金庫にしまっているのです。」おとうさんは、お金にかえられないたいせつな宝物だといっおとうさんは、お金にかえられないたいせつな宝物だといっ

待って、相談してみましょうよ。」君は、知恵も力もあって、たのもしいわ。井上君のくるのをちゃんは、おくびょうものでたよりにならないけれど、井上ここへ遊びにくるのよ。井上一郎君と、ノロちゃんよ。ノロ「ああ、すっかりわすれていた。いまに、ふたりの団員が、

「井上君ならいいですね。ぼく、あの人すきですよ。それに、

ノロちゃんだって、あいきょうものだし……。

さんせいするのでした。

やがて、井上君とノロちゃんがやってきました。そこで、

四人が探偵事務所の客間のテーブルをかこんで、 相談をはじ



意見をのべました。

「夜もかい?」夜中もかい?」

ノロちゃんが心配そうにたずねます。

こうたいするのさ。チンピラ隊は、夜中だってへいきだから だってそうだよ。だから、夜の九時ごろには、チンピラ隊と 「おそくなると、うちでしかられるというんだろう? ぼく

浮浪少年たちです。明智探偵はそれらの少年に、すりやかっシッッグ は、まっさきにあたしがやるのよ。みんな、とめるんじゃな すもの。 少年探偵団のてつだいをさせることになっているのです。 にか事件がおこると、「ありの町」の事務所へ電話をかけて、 こませ、くずひろいなどをやらせてあるのです。そして、な 働者の会の会長をやっている友だちにたのんで、そこに住み ぱらいをはたらかぬようによく教えて、「ありの町」という労 いのよ。 小林さんがいないときには、あたしが少年探偵団の指揮官で 「じゃあ、それにきめましょう。むろん、あたしもいくのよ。 チンピラ隊というのは、 あたし、 あたし、男の服をきていくわ。 冒険がしたくって、 小林団長が上野公園などで集めた 腕がむずむずしている そして、危険なこと

マユミさんは、青年のようなかっぱつな口調でいうのでし

手のあいているこどもを、よびよせました。 すぐに 「あ りの町」へ電話をかけて、 チンピラ隊のうち、

口ちゃんと、チンピラ隊三人と、あわせて六人が、それぞれ、 そして、日のくれるのを待って、マユミさんと井上君とノ

きたない服をきて変装すると、自動車で神山進一君の家のそ

ばまでいきました。 ものかげに身をかくし、 それから、ばらばらにわかれて、神山家のへいのまわりの なにかあやしいことが起こるのを、

どろぼう人形

待ちかまえるのでした。

ずつ、つけたり消したりすることをつづけて、外の少年たち から、万年筆がたの懐中電灯を、パッ、パッ、パッ、と三度 君は家の中で、あのあやしい人形を見はっている役目です。 神山進一君は、みんなより一足さきに家へ帰りました。進 夜になって、なにかあやしいことが起こったら、二階の窓 知らせる約束でした。この万年筆がたの懐中電灯は、「探

はいるころになっても、べつになにごともおこりません。 夜になり、夕ごはんがすみ、勉強の時間がすみ、ベッドに

偵七つ道具」の一つなのです。

外で見はりをしている仲間のことを考えると、眠れるもので はありません。 進一君は、昼間の服をきたままベッドにはいりましたが、

と待っているだろう。」 かもしれない。だが、マユミさんとチンピラ隊は、まだ残っ 「もう九時すぎだから、井上君とノロちゃんは、家へ帰った まっ暗やみの中で、 なにか起こるのを、 じっ

そう思うと、 なんだか、 みんなにすまないような気がする

のでした。

うと、もうじっとしていられなくなりました。 美しいユリ子人形が、こっそり歩いているのではないかと思 シーンとしずまりかえっています。そのしずかな中を、あの どきどきしてきました。家じゅうの人がみんな寝てしまって、 それから三十分もたったころです。進一君は、なぜか胸が

動くけはいが感じられたからです。 うに、壁をつたって、人形部屋のほうへ歩いていきました。 た。電灯が消してあるので、まっ暗です。足音をたてないよ 進一君はベッドを出て、そっとドアをあけ、廊下へ出まし 進一君はハッとして立ちどまりました。かすかに、ものの

に明るくなったような気がします。 っつけるようにして見ていますと、 そこは、廊下がTの字になっていました。壁にからだをく むこうの廊下が、ほのか -37-

うす暗い中にもはっきり見える、

ゆうぜんもようが、ひら

廊下を、スーッととおりすぎていきました。 なふろしきづつみのようなものを胸にだきしめて、 ひらとしました。ユリ子人形です。おばけ人形は、 こんどこそ、夢ではありません。ユリ子人形は、やっぱり 白い四角 むこうの

生きていたのです。しかし、あの白いふろしきづつみは、い

ったいなんでしょう?

てにさとられぬように、あとをつけました。 のおの宝冠』の皮箱にちがいない。やっぱりそうだった。あ いつは宝冠を盗むために、この家へはいりこんできたのだ!」 「あっ、そうだ! あの大きさ、あの四角い形、あれは、『ほ 進一君は、とっさにそこへ気がつきました。そして、あい

ユリ子人形は、廊下のつきあたりまでいくと、 そこの階段

ラス窓がならんでいます。をのぼりました。階段の上は庭に面した廊下で、いくつもガ

窓を開きました。 おばけ人形は、そのまん中ほどまでいくと、そっとガラス

なにも二階へあがらなくても、下の廊下の窓を開けばいいの「あっ、窓から庭へとびおりるつもりかしら?」それなら、

ようすをうかがっていました。進一君は、ふしぎに思って、ずっとこちらの窓のそばで、

「いいで) いっこうのぎ まっこ。 すると、人形は、胸にだいていた白いふろしきづつみを、

と思うまもなく、白いふろしきづつみは、まっ暗な庭へ、パ「おやっ、いったいなにをするんだろう?」両手で頭の上にさしあげました。

白いものが、スーッと曲線をえがいて、下の地面へ落ちてッとほうりだされたではありませんか。

いくのが見えました。

つもりなんだ!」いるのだ。そして、ふろしきづつみを受けとって、逃げだす「あっ! わかった。庭のやみの中に、だれかが待ちうけて

ることを、なんどもつづけるのでした。出して、パッ、パッ、パッと三度ずつ、つけたり消したりすのしないようにそれを開くと、万年筆がたの懐中電灯をとりと開いてすべりこみ、おもてがわに面した窓に近づいて、音進一君は、それと気づくと、そこの空部屋のドアを、そっ

た一台の自動車がとまっていました。

くのでした。自動車は、音もなく動きだし、どことも知れず遠ざかってい自動車は、音もなく動きだし、どことも知れず遠ざかっていたうしろのドアから、自動車の中にとびこみました。するとへいをのりこえ、そこへ、走ってきたかと思うと、開いていまっ黒な服をきた男が、白いふろしきづつみをかかえて、

るのを、怪人物は、すこしも気づかなかったようです。そのとき、自動車のうしろで、みょうなことが起こってい

,は。の荷物を入れるトランクのふたが、三センチほど開いていまの荷物を入れるトランクのふたが、三センチほど開いていま明がへいをのりこして走ってくるまでは、自動車のうしろ

んか。 貝がらの口をとじるように、ピッタリしまったではありませくれが、男の足音をきくと、ちょうど敵におそわれた貝が、

ないでしょうか。ひそめて、怪人物のすみかをたしかめようとしているのではも、もしかしたら、男姿のマユミさんがトランクの中に身をす。それはチンピラ隊のひとりではないでしょうか。それとどうやら、トランクの中に人間がかくれているらしいので

ユリ子人形の秘密

りなのです。どらないうちに、さきまわりをして、待ちかまえているつもかけ出しました。ユリ子人形がサナエちゃんの人形部屋へも進一君は、懐中電灯のあいずをしておいてから、すばやく

で、ユリ子人彡を引っかけたこぎは、人彡よりらるこから、進一君は、こんやは、はじめからその計画でした。いまま

たたけばこちこちと音のする、ほんとうの人形でした。人形部屋へはいったのです。すると、そこにいるのはいつも、で、ユリ子人形を追っかけたときは、人形よりもあとから、

形よりさきまわりをして、人形部屋の中に、かくれていなけかわるところを、見てやりたいと思いました。それには、人ですから進一君は、生きて動く人形が、こちこちの人形と

進一君は、いまこそ、さきまわりをするときだと思いましればならないのです。

た。

人形のいる窓よりも、ずっと人形部屋に近かったので、だいそのとき進一君が、懐中電灯のあいずをした窓は、ユリ子だすのを、たしかめようとしているのです。ていました。下にいる男が、うまくつつみを受けとって逃げそのまま窓のところに立って、じっとまっ暗な庭を見おろしユリ子人形は、あの四角いふろしきづつみをなげてから、

見えたんだ。

つきました。 はいりました。そして壁のスイッチをおすと、パッと電灯が 進一君は、足音をたてないようにかけ出して、人形部屋へ

じょうぶ、さきまわりができるのです。

と声をたてて、立ちすくんでしまいました。(その光で、ひと目、部屋の中を見たとき、進一君は、「あっ!」

からです。 いつのまにかユリ子人形が、ちゃんと、部屋に帰っていた

はやかったにきまっている。ユリ子人形は、まだ廊下をはん「そんなはずはない。廊下は一本なんだから、ぼくのほうが

ぶんも歩かないころだ。」

ッとあることに気がつきました。「はてな?」と、こくびをかしげていましたが、やがて、ハーは一君は、そう考えました。それにまちがいはないのです。

いままで、どうして、そこへ気がつかなかったのだろう。着物をきた、生きた人間!(そうだ!)そうにきまっている。こちこちの、ほんとうの人形、もうひとつは、そっくり同じ「あっ!)そうだ。ユリ子人形はふたりいるんだ。ひとつは、

間がいっぺんに、こちこちの人形にかわってしまったようににこしかけているもんだから、ごまかされたんだ。生きた人の中かなんかにかくれてしまって、人形のほうだけが、いすぼくが追っかけてきたときには、人間のほうは、おしいれ

た。そして、すばやくおしいれにはいって、ふすまを細めに進一君は、とっさのあいだに、これだけのことを考えましあいつの帰ってくるのを待ちぶせしてやろう。」 それじゃこんどは、こっちが、おしいれの中にかくれて、

開き、じっと、ようすをうかがっていました。

くり出して、みんなをおどかそうとしているのです。るのでしょう。つまり、人形が生きて動くという、怪談をついると思わせるために、足になにか、かたいものをはいていが、聞こえてきたではありませんか。あくまで人形が歩いてすると、こつ、こつ、こつ、こつと、廊下に、人形の足音

ドアがスーッと開きました。ああ、はいってきたのです。ていました。心臓のどきどきする音が聞こえるほどです。進一君は、息をころして、ふすまのすきまから目をみはっ

ユリ子人形が、はいってきたのです。

そして、顔までも。 ているユリ子人形、そっくりです。着物のもようも、 こちらにこしかけているユリ子人形、ドアのところに立っ 帯も、

長いふり袖、はでなゆうぜんもよう、ピカピカ光るきんら

んの帯、美しい人形がふたりならんでいるのです。

が、あるものでしょうか、 進一君は、息もできないほどでした。こんなふしぎなこと 人形とそっくりの顔をした少女が、

もうひとりいるなんて。

す。 ありません。それならべつに、ふしぎでもなんでもないので なくて、この少女をモデルにして、人形をつくったにちがい いや、そうではありません。少女が人形に似ているのでは

るつもりでしょう。 ちらへ歩いてきます。やっぱり、このおしいれの中へかくれ ユリ子人形とそっくりの少女は、ドアの前をはなれて、こ

進一君は、グッと心をひきしめました。このぶきみな少女

と、たたかわねばならないのです。

少女は、もう二メートルほどに近づきました。一メートル

になりました。 いまです!

出しました。 進一君は、 パッとふすまを開いて、おしいれの中からとび

「あっ!」

とうしろをむくと、いきなり、ドアのほうへかけ出すのでし 少女が、おどろきの叫び声をたてました。そして、くるっ

た。

「まてっ!」

進一君も、すぐに、そのあとを追いました。ドアをとび出

して、廊下を走りました。

ぎに、帯のはじをひっかけました。そして、あっと思うまに、 とけました。庭にめんした窓に走りより、そこに出ているく 少女は、走りながら、帯をといています。帯が、すっかり

少女は、窓の外へとび出したのです。

けた帯をつたって、庭へおりていきます。そして、パッと地 進一君も、その窓へかけつけました。少女はくぎにひっか

くれえ……。」 「おうい、だれかきてくれえ。……ユリ子人形をつかまえて

面へとびおりました。

そして、じぶんも、 少女は庭におりると、へいのほうへ走りながら、ふり袖の 帯をつたって、庭へおりていくのです。 -40-

進一君は、ありったけの声を、ふりしぼって叫びました。

ピースを着ていたのです。 着物をぬぎすててしまいました。その下に、

進一君も、庭へとびおりました。そして少女のあとを追い

ながら、

 \vdots 「おうい、はやくだれか、ユリ子人形をつかまえてくれえ…

と叫びましたが、だれも家の中から出てくるようすがありま

ように、身の軽いやつです。進一君もへいの下にかけつけて、 少女の足をひっぱろうとしましたが、もうまにあいません。 少女はもう、へいによじのぼっていました。かるわざ師の

黒のうすいワン

道路へとびおりてしまいました。へいの上に、すっくと立った少女のすがたは、パッと、外の

を着て、ふり袖や帯をかかえて、毎晩、外からしのびこんでわけにはいきません。ひょっとしたら、あの黒いワンピースこにかくれていたのでしょう。ずっと、おしいれの中にいるそれにしても、この少女は、このあいだから、いったいど

チンピラ隊の活躍

いたのかもしれません。

が、パッと地面にとびおりました。たしても、進一君の叫び声がしたかと思うと、その黒いかげもこうのへいの上に、黒いかげが動きました。そして、ま

のでした。

わかりました。やみに目がなれているので、チンピラたちには、それがよく女は黒い洋服のようです。長いあいだまっ暗なところにいて、女は黒い洋服のようです。長いあいだまっ暗なところにいて、ユリ子人形はふり袖を着ていると聞いていたのに、この少

「へんだなあ。あれ、ユリ子人形だろうか?」

「じゃあ、あいつを、つかまえようか。」「だって、へいからとびおりたんだから、まちがいないよ。」

「もちろんさ。」

で、少女のそばにかけよりました。地面にふせていたのがパッと立ちあがり、恐ろしいいきおい・チンピラたちは、そんなことをささやきあったかと思うと、

あ、きたないこじきの子どもじゃないの!」「あらっ、あんたたち、あたしをどうしようっていうの。まから、たちまち、チンピラたちにつかまってしまいました。少女はへいからとびおりて、ちょっと、ころんだものです

「なにい、こじきだってばかにするねえ。おいらは少年探偵どうして、はなすものではありません。ました。そして、ふりはなして、逃げだそうとするのですが、少女は、らんぼうなことばで、チンピラたちをしかりつけ

団の別働隊で、チンピラ隊っていうんだ。明智先生の弟子だ

そのときです。とつぜん、やみの中から太い声が聞こえて少女の上にのしかかって、組みふせてしまいました。三人のチンピラは、口ぐちに、そんなことをわめきながら、

ぞっ!」

「こらっ、チンピラども、その子をいじめると、しょうちしきました。

姿が、立ちはだかっていました。黒いセーターをきた男です。びっくりしてふりむくと、そこに、ボーッと、大きな男のないぞっ!」

「あっ、てめえ、どこのやろうだっ!」

チンピラのひとりが、どなりかえしました。

「なまいきいうな。さあ、その子をはなせっ。」

「ワーッ、いてえ!」首をつかんだりして、ひとりずつ、地面になげつけました。」男は、いきなりそばによると、チンピラの手をつかんだり、

「てめえ、悪者のなかまだなっ! 逃がすものか

っ。 _

ぶりついていくのでした。なげられても、チンピラたちは起きあがって、男にむしゃ

かないません。みんなひどくなぐりつけられて、へたばってしかし、男はひどく力が強くて、チンピラ三人ではとても

しまいました。

をとって、やみの中へ逃げさってしまいました。 男はにくまれ口をのこして、少女をひったてると、その手「ざまあみろ。もう動けないだろう。それじゃ、あばよ!」

形にばけていた少女を、ついにとり逃がしてしまったのです。君がかけつけましたが、もうあとのまつりでした。ユリ子人(そのときになって、やっと門のほうから、神山さんと進一

×

とまっていました。のはずれの、さびしい原っぱの中にある、古い西洋館の前に、そのころ、宝冠のつつみを持った男の自動車は、世田谷区

館の門の中へ、はいっていきました。て車をおりると、運転手になにかささやいてから、その西洋男は、白い四角なふろしきづつみを、だいじそうにかかえ

てられたものとみえて、西洋のばけものやしきみたいな、ぶそれは赤れんがの二階建ての西洋館で、よほどむかしに建

ものです。

が、うずくまっているような感じでした。おおわれた西洋館は、やみの中に、やみより黒い巨大な怪物へいはこわれ、門の鉄のとびらはいびつにゆがみ、ツタに

す。おやっ? これはどうしたというのでしょう。さっきのさのは、なにか四角な白いつつみを、こわきにかかえていまい出してきました。男の子の服をきたマユミさんです。やっい出してきました。男が門の中に消えると、自動車のうしろのはいれるのです。男が門の中に消えると、自動車のうしろの門のとびらがこわれているので、かぎがなくても、自由に

つみをかかえていました。そうではありません。さっきの男も、たしかに同じようなつ42でしょう。あの男から、とりかえしたのでしょうか。いや、マユミさんは、いつのまに、こんなつつみを手にいれたの

男が持っていた白いつつみと、そっくりです。

んと、白いつつみがおいてあるではありませんか。て、かぎでドアを開いています。そこの石だんの上に、ちゃごらんなさい。あの男は、赤れんがの西洋館の入口に立っ

ポケット小僧

ごもご動いているものがあります。ンクから出てしまっても、まだトランクの中で、なにか、もところが、ふしぎなことに、マユミさんが、自動車のトラ

いや、動物ではありません。人間の子どもです。トランクマユミさんは、犬かネコでも、つれてきたのでしょうか?

の中から、すばやくとびだしてきたのは、七つか八つぐらい

顔はまっ黒によごれ、ぼろぼろの服をきています。チンピに見える、ちっちゃな男の子でした。

ど、小さいといういみなのです。十二にもなっていて、七つポケット小僧とは、へんな名ですが、ポケットにはいるほラ隊のひとりで、名まえはポケット小僧という少年です。

か八つぐらいに見えるほど小さいので、そんなあだなでよば

ので、マユミさんが自動車のトランクにかくれて、怪人のすポケット小僧は、マユミさんを、たいへん尊敬していますとがあります。チンピラ隊だいいちの人気ものでした。しっこい少年で、これまでにも、いろいろ手がらをたてたこしかし、からだは小さいけれども頭はいいし、ひどくすば

れるようになりました。

ったのです。
ので、マユミさんが自動車のトランクにかくれて、怪人のすので、マユミさんが自動車のトランクにかくれて、怪人のす。ガケットリ僧は、マニミさんが

トランクの中であらそっていて、運転手に気づかれたらたにくっついて、てこでも動かないのです。そうとしましたが、どうしてもおりません。すみっこのほうとから、ポケット小僧が、もぐりこんできましたので、おろマユミさんが、トランクの中へしのびこんだとき、すぐあ

ット小僧があらわれたのは、そういうわけだったのです。たのです。いま、あやしい西洋館の前で、トランクからポケいへんですから、マユミさんも、つい、そのままにしておい

たので、運転手はすこしも気づかず、そのまま車を出発させ、、ふたりは、ひじょうにすばやく、トランクからすべり出し

むこうのほうへ、遠ざかっていきました。

マユミさんとポケット小僧は、やぶれた門をはいって、西

走ることを練習しているので、ふたりとも、いくら走っても、洋館の玄関のほうへいそぎました。ひごろ、音をたてないで

すこしも足音がしないのです。

う。トやっていました。かぎでドアを開こうとしているのでしょトやっていました。かぎでドアを開こうとしているのでしょ怪人は、西洋館の入口のドアの前にたって、なにかコトコ

ているのです。りがさしていません。まるで空家のように、しずまりかえっりがさしていません。まるで空家のように、しずまりかえったりは、まっ暗です。西洋館の窓からは、すこしもあか

あわないのか、ずいぶんてまどるようです。において、しきりにドアを開こうとしています。かぎがよく怪人は、宝冠のはいった白いふろしきづつみを、石段の上

が、どうやら人間のようです。ネズミ色の影が近づいてきました。暗くてよくわかりませんすると、そのとき、石段のへんのやみの中に、もうろうと、

わかりゃあしないよ。」
わかりゃあしないよ。」
おわかりゃあしないよ。
これないよ。これなばけものである。
におれるが、
におれるがい
にもど
には、
のはいったが、
には、
のはいがは
にもど
には、
のはいの
にもど
には、
のはいの
にもど
には、
のはいの
にもど
には、
のはいの
にもど
には、
のはい
にもど
には、
のはい
にもど

そと、ささやきました。ポケット小僧が、マユミさんのうわぎをつかんで、ひそひ

た、帰りたければ、さきにお帰りなさいな。」た、帰りたければ、さきにお帰りの助手のはじだわ。あんどんなやつだか、この家には、どんなしかけがあるか、それもうちょっと、さぐっておきたいの。どろぼうのかしらが、「いいのよ。このまま、警察へ連絡してもいいんだけれども、

「いやだい。おれ、帰るもんか。どこまでも、おねえさんのた。 マユミさんは、じゃけんにいって、小僧をつきはなしまし

マユミさんは、門をはいって、西洋館のよこてへ回ってい

んだん、奥のほうへ歩いていきました。 マユミさんは、どこかにしのびこむすきまはないかと、だ

よって、そっと、中をのぞいてみました。ありませんか。おやっと思ってたちどまり、その窓のそばにすると、ひとつの窓の中に、かすかなあかりが見えたでは

わせめが、開いています。 おラス窓の中に、あついカーテンがさがっていて、そのあ

マユミさんは、窓ガラスに顔をつけるようにして、のぞき

ました。

乗ってきた男にちがいありません。
しかし、そのひとりは、宝冠のつつみを持って、自動車にで、ふたりの顔が、はんぶんくらいずつしか見えません。ブルをへだてて、むかいあっていました。せまいすきまなのブルをなげています。そのにぶい光の中に、ふたりの男がテー電灯ではなくて、テーブルの上のろうそくが、赤ちゃけた

ひじかけいすに、ゆったりとこしかけているのです。そっくりの顔です。それが、黒いビロードのガウンをきて、ねたまっ黒な口ひげ、三角がたのあごひげ。西洋悪魔の絵との下に、ほそい目がキラキラと光り、高いワシ鼻、ぴんとはん中からきれいにわけてなでつけ、キュッとさかだったまゆそのむこうがわにいるのは、ふしぎな人物です。頭を、ま

きましたよ。ユリ子人形が、金庫の暗号をたちぎきして、盗「先生がお帰りになるのを待っていました。先生、うまくい

ました。先生の計略は、みごとにあたりましたね。」みだしてくれたのです。それをうけとって、ここへ持ってき

い、おい、はいい、がいい。とを、西洋悪魔のような男に報告しているのです。西洋悪魔とを、西洋悪魔のような男に報告しているのです。西洋悪魔自動車に乗ってきた男が、しゅびよく宝冠を盗みだしたこ

を、先生、先生とよんでいます。

でしょう。むろん、人形じいさんと関係があるのにちがいあ人形を売りにきた男ですが、こいつの正体はいったい、何者、の西洋悪魔みたいなやつは、神山さんのうちへ、ユリ子

せん。魔法つかいのことですから、どんな顔にでもばけられりません。もしかしたら、人形じいさんと同じ人かもしれま

るのでしょう。

宝物を、見せてもらおうか。」のと、うまくやってくれると思っていたよ。……では、その「うん、あのユリ子は、なかなか知恵がはたらくからね。き

したが、持ちあげたかとおもうと、「あっ!」という叫び声がは、その箱のふたに両手をかけて、うやうやしく持ちあげまをほどきます。中から四角い皮ばりの箱が出てきました。男」男はすぐに、テーブルの上においてあった、白いふろしき

ドの台座の上に、一枚の紙がおいてありました。げもかたちもありません。そして、宝冠のかわりに、ビロー箱の中は、からっぽだったのです。「ほのおの宝冠」は、か

西洋悪魔は、

いそいで、その紙をとって読んでいます。

読

だのです。

聞こえてきました。西洋悪魔と、部下の男とが、一度に叫

. ک

歯がみをしているのです。のようにかがやき、赤いくちびるをひきしめて、ぎりぎりと、かだっているまゆが、いっそうさかだち、ほそい目が、リンむにしたがって、かれの顔が、まっかになってきました。さ

マユミさんは、その紙にかいてある文章を、ちゃんと知っ

それは、ていました。

か、宝冠が消えてしまったのだ。 冠のはいった箱を盗みだした。それなのに、いつのまにぬき出したかわかるかね。ユリ子人形は、たしかに、宝にかえしてもらったよ。どうして宝冠を、箱の中から、ているだろうが、上には上があるのだ。宝冠は、たしかきみは、ユリ子人形をつかって、うまくやったと思っ

と、いうのです。なぜそれをしっていたかといいますと、じ______

お気のどくさま!

進一君から、箱の色や大きさをきいて、にたような箱を手にマユミさんは、宝冠が盗まれそうだとわかったとき、神山つは、この文章は、マユミさんが、じぶんで書いたからです。

も、わすれませんでした。のです。ほんものと同じように、白いふろしきでつつむこと

いれ、その中へこの手紙をいれて、ちゃんと用意しておいた

て、かぎを、ガチャガチャやっているすきに、そっと、ほんくれ、男が、ほんもののつつみを西洋館の入口の石段においーその白いふろしきづつみを持って、自動車のトランクにか

宝冠のつつみを、近くのお友だちの家にあずけておいて、まものとにせものとを取りかえて、逃げだしたのです。そして、

た、西洋館へひきかえしたというわけでした。

マユミさんのまわりには、恐ろしい怪物がおしよせていたのした。それが、ゆだんでした。すこしも気のつかないまに、れしくてたまりません。夢中になって窓の中をのぞいていまマユミさんは、じぶんのトリックがうまくいったので、う

人造人間

が、さやさやと、かすかな音をたてているのです。なにかうごめくけはいを感じました。あれはてた庭の草むら密をのぞいていたマユミさんは、ふと、じぶんのうしろに、

をわけて、はいよってくるような感じなのです。たてるはずはないのです。なんだか、大きなヘビが、草むらです。ポケット小僧ではありません。あの子が、こんな音をマユミさんは、ゾーッとしました。ふりむくのがこわいの

見るほかはないのです。どんなひどいめにあうかもしれません。思いきってうしろをしかし、いくら恐ろしくても、このままじっとしていたら、

まっ暗です。まっ暗な中に、なにやら大きなものが、もやした。 マユミさんは、そう決心すると、パッと、うしろをむきま

いままで、ろうそくの火を見ていたので、やみに目がなれもやと、うごめいています。

るようになったのです。と、そこにうごめいているものが、ぼんやりと、見わけられていません。しかし、それがだんだんなれてきました。する

が、ヌーッと、たちはだかっていたからです。そこには、どんなおばけや幽霊よりも、もっと恐ろしいやつマユミさんは、心臓がとまってしまうような気がしました。

っているのです。 鉄のような黒い色で、頭が、おそろしくでっかくて、四角ばごつした岩のような、かっこうをしていました。ぜんたいに、そいつは、ふつうの人間の倍もあるようなからだで、ごつ

ポケット小僧はどうしたのかと、キョロキョロと、そのへいるありさまは、なんともいえない気味のわるさでした。命でいつが、やみの空をうしろにして、ヌーッと、つったってでいるありさまは、なんともいえない気味のわるさでした。かるありさまは、なんともいえない気味のわるさでした。かるありさまは、なんともいえない気味のわるさでした。では、まるで鉄の板でできているようで、それが、ちょうがいかに作りものだと思うと、いっそう恐ろしいのです。では、まるで鉄の板でできているようで、それが、ちょうがいがいが、まるで鉄の板でできているようで、それが、ちょうがいがであります。四角ばった大きくて、のこぎりのようと、いっそう恐ろしいのです。

やっぱり人形です。命がなくて動く人形です。人形じいさうに!

どこへいったのでしょう。あんなチンピラでも、こういうと

んを見まわしましたが、どこにも姿が見えません。いったい、

人形が動いたのは、トリックでした。しかし、ここには、機んも、こんどの西洋悪魔も、人形づくりの名人です。むすめ、やっはり人形です。命がなくて動く人形です。人形じいさ

いるのです。 械じかけで動くロボットがいるのです。恐ろしい人造人間が

に、パッ、パッと、ついたり消えたりしているのです。赤いネオンのような色です。それが、またたきでもするようけてあるのでしょう。みんな、まっかな目を光らせています。りませんか。同じかたちのロボットです。目には電灯がしか黒い鉄の大入道が、つぎからつぎと、あらわれてくるではあーしかも、それがひとつだけではありません。やみの中から

ロボットは、みんなで五つでした。でも、マユミさんには、

まいました。

それが二倍にも三倍にも感じとられたのです。

がいありません。 まう。たいていの人なら、きっと気をうしなってしまうにちのっし、のっし近づいてきたら、その恐ろしさはどんなでして、まっかな目をパチパチやりながら、ちょうつがいの足で、間の倍もあるような大きな鉄の機械人間が、五つもあらわれみなさん、想像してごらんなさい。まっ暗やみの庭に、人

てて、もう目の前に近づいてきました。ロボットたちは、ギリ、ギリ、ギリという、歯車の音をた

のあいだをくぐって、逃げようとしました。マユミさんは、逃げようとしました。ロボットとロボット

ろしい力で、はねのけることなど思いもよりません。り、手を出したりして、じゃまをするのです。鉄の手はおそるで人間のように、マユミさんの逃げるほうへ、足をあげたしかし、どうしても逃げられないのです。ロボットは、ま

「助けてえ……。」

マユミさんは、とうとう、悲鳴をあげてしまいました。そ

その窓は、いつのまにか、まっ暗になっていました。ろう魔でもなんでも、ロボットよりは、ましだと思ったのです。して、西洋悪魔のいる窓のそばへ逃げもどりました。西洋悪

そくを消してしまったのでしょう。

るとつりあげ、あっというまに、部屋の中へ、ひきいれてしおもうと、やにわに、マユミさんの両腕をつかんで、かるがっ暗な部屋の中から、ニューッと、二本の手が出てきたかとがらがらっと、ガラス戸の開く音がしました。そして、ま

れないと、思いました。人造人間にとりかこまれているよりは、どんなにましだかしちらにしても、あいては人間です。マユミさんは、恐ろしい西洋悪魔か、あの部下の男か、どちらかです。しかし、ど

「きさまは、何者だっ。」

いました。すると、こんどは部下の男の声で、いました。すると、こんどは部下の男の声で、す。マユミさんは、部屋の床にころがされたまま、だまって、やみの中から、ふとい声がきこえました。西洋悪魔の声で

ふろしきづつみを石段の上においといたのです。玄関のドアをあけるのに、ちょっとてまどった。そのあいだ、んよ。どうもおかしいことがあるんです。あっしはさっき、「先生、ひょっとしたら、こいつが、くせものかもしれませ

先生、こいつは、敵のまわしものですぜ。まさか、明智小なったのです。ああ、そうだ。そうにちがいない。してみると、そのときから、ふろしきづつみが、いやに軽くつつみと、すりかえられたかしたにちがいない。いま思いだそのすきに、なかみをぬかれたか、それとも、べつの箱の

五郎じゃあるまいが、明智の手下にちがいない。ぶちのめし

のだよ。」

男は、やっと、そこへ気がついたようです。て、どろをはかせましょうか。」

あたりもある。もし、こいつが明智の手下だとすると、だい「いや、おれに、まかせておけ。おれは、ちょっと、こころ

におれの魔力を見せてやろう。ウフフフフ……。」じな人じちだよ。ひとつ、明智先生へのおみやげに、こいつ

た。 西洋悪魔は、ぶきみな声で、さもおかしそうに笑うのでし

地底のジャングル

さあ、はくじょうしたまえ。」つみをすりかえたのもきみにちがいない。え、そうだろう?少女がいると聞いたが、きみはそのマユミだろう。宝冠のついね。ああ、わかったぞ。明智探偵の助手に、マユミという「おい、きみは何者だ。男の服をきているが、どうも女らし

西洋悪魔が、恐ろしい顔になって、せめたてるのです。

まって、あいてをにらみつけていました。 マユミさんは、どう答えたらいいのかわからないので、だ

ったかね。きみはもう一生、明智探偵のところへは帰れないそして、まあ、とうぶんここに、滞在するんだね。え、わかものを見せてあげよう。きみのびっくりするようなものだよ。フ……まあいい。せっかくきてくれたんだから、おもしろいっていたんだね。きみの顔に、そう書いてあるよ。ウフフフ「答えられないかね。それじゃ、おれのいったことが、あた

にとりこにしておくつもりなのです。いました。西洋悪魔は、マユミさんを、いつまでも、この家、とばはおだやかですが、じつに恐ろしいいみがこもって

ぱり、おれが作ったものだよ。」ましいがはいって動きだすのだ。さっきのロボットも、やっなものを作る。そして、おれの作ったものには、みんな、たおれは美術家だからね。人形も作るし、そのほか、いろいろ「さあ、こっちへきたまえ。おもしろいものを見せてやる。

です。ふりほどくことなど思いもよりません。にぎりました。まるで鉄でしめつけられるような恐ろしい力西洋悪魔は、そういって、マユミさんの手首を、ギュッと

、アの木の邨下に出て、おようがつのごでから、べつの邨そのあとからついていきました。(うんぐんひっぱられるままに、マユミさんは立ちあがって、

屋にはいりました。 ドアの外の廊下に出て、むこうがわのドアから、べつの部

ころへ案内してやるからね。」「しばらく、ここに待っていたまえ。いまにきみを、いいと

みょうな男です。まっかな背広をきて、恐ろしくでっかい、テーブルのむこうに、ひとりの男がいすにかけていました。中に大きなテーブルが、ひとつおいてあるばかりです。そのました。なんのかざりもない、がらんとした部屋です。まんらかぎをかけて、どこかへいってしまいました。西洋悪魔はそういって、ピシャンと、ドアを閉めると外か

みどり色のちょうネクタイをしています。頭の毛は、西洋人

うに、てらてらと光っています。そして、茶色のモジャモジのように茶色で、ふさふさして、顔は、あぶらでもぬったよ

ャしたまゆげの下に、まんまるな目が、じっと、こちらを見

ではなく、からだぜんたいが、まるでミイラのように、ちっしも動きません。まばたきもしないのです。いや、目ばかり気味のわるいことに、その目が、こちらを見たまま、すこ

ているのです。

「きみ、こちらへきたまえ。」

目も動きません。の男がいったのでしょう。しかし、口はすこしも動きません。子どものような、かんだかい声が聞こえました。テーブル

まるで腹話術でもやっているような感じです。

だったのでしょう。

の男は、また、同じことをくりかえしました。マユミさんが、へんじもしないでつったっていますと、そ

「きみ、こちらへきたまえ。」

ても、しぜんに、足が前に出るのです。に引きよせられるような気がしました。歩きたくないと思っそれを聞くと、マユミさんは、なんだか、大きなじしゃく

声が聞こえました。テーブルの男が、目も口も動かさないで「えへへへへ……。」と、なんともいえない、へんてこな笑い

そして、テーブルのほうへ、三足ほど進みますと、

いことがおこりました。笑ったのです。その笑い声がまだおわらないうちに、恐ろし

たのです。 マユミさんの立っている足の下の床が、なくなってしまっ

した。そして、どしんと、しりもちをつきました。スーッと、深い深い谷そこへ落ちこんでいくような気がしまマユミさんは、一瞬、からだが宙に浮いたかとおもうと、

いていて、マユミさんはその上をすべって、地下室に落ちたうな気がしたのです。その下に、すべり台のようなものがつそのふたが、開いたのです。それで、からだが、宙に浮くよマユミさんの歩いていた床板が、落とし穴になっていて、

のでした。

て、マユミさんを、落とし穴の上まで、歩かせるだけの役目ったかもしれません。人形は、「こちらへきたまえ。」といっ洋悪魔が作った人形で、あの声は、テープレコーダーの声だ上の部屋のテーブルのむこうにいた気味のわるい男は、西

あたりが見わけられるようになりました。なんだかよくわかりませんでしたが、やがて、ぼんやりと、地下室は、ひどくうす暗くて、目がなれるまでは、なにが

ものすごい森です。にちがいありません。写真で見た南洋のジャングルのような、てへんですが、大きな木が立ちならんでいるのですから、森そこは、森のようなところでした。家の中に森があるなん

地下室に森があるなんて、ふつうには考えられないことです。マユミさんは、夢を見ているのではないかと思いました。

-4

と、かさなりあっているのです。 うのシダを千倍にしたような形のものなどが、ウジャウジャろしく大きく、まっさおな巨人のうちわのような形や、ふつおたがいに巻きつきあっているのです。木の葉は、みんな恐げっています。枝ではなくて、ふといつるがむやみにのびて、ジャングルには、見たこともないような、みょうな木がし

てまわりたいような気持になりました。とりこになったこともわすれて、そのジャングルの中を、見マユミさんは、あっけにとられてしまいました。そして、やかなので、火が燃えているのではないかと思ったほどです。ッと、まっかなものが見えました。その色が、あんまりあざるんな、おばけのような木の葉のしげったむこうに、チラ

ずと、ジャングルの中へはいっていきました。そこで、しりもちをついたおしりをさすりながら、おずお

まっかなもののそばにきました。な木の葉のあいだを、くぐって歩いていきますと、さっきの、、、一、でのようにもつれている、つるのような木の枝や、巨大

んは、チョウくらいの大きさなのです。た。その巨大な花を、ふつうのユリの花とすれば、マユミさじぶんが十センチぐらいのこびとになったような気がしましを千倍にしたような形です。それを見ると、マユミさんは、それは、びっくりするほど巨大な赤い花でした。ユリの花

ふと気がつくと、背中のほうで、ごそごそ動いているもの

のように、マユミさんに巻きつこうとしているのです。ふりむくと、ふとさ五センチもあるような長いつるが、ヘビがありました。なんだか人間の手のようです。ギョッとして

マユミさんのおなかを、ひと巻きしてしまいました。生きもののように、とっさにパッとのびて、あっというまに、びっくりして逃げようとしましたが、そのつるは、まるで

恐ろしい力です。一度巻

きつけば、もうはなすもに、くるくると、木のみきに、くるくると、木のみきあっというまに、マュあっというまに、マュあげてしまいました。

したが、ぐんぐん、上につりあげられるばかりです。マユミさんは、手足をばたばたやって、のがれようとしま

ジャングルの中には、恐ろしい木があって、つるで人間を巻マユミさんは、いつか本で読んだことがあります。南洋の

これはきっと、その、人をくう木にちがいないと思いましきこんで、たべてしまうというのです。人をくう木です。シュングルの中には、翌月しい才だあって、できて人間を考

「助けてえ……。」

すると、マユミさんは、空中でもがきながら、悲鳴をあげました。

「えへへへへへ・・・・・。」

鼻や、口に見えるのです。の顔みたいなものがありました。木のみきのしわが、目や、の顔みたいなものがありました。木のみきのしわが、人間かえもあるふといみきで、その上のほうに、なんだか、人間した。おばけの木が笑ったのでしょうか。その木は、ふたかと、ジャングルにひびきわたる、恐ろしい笑い声がおこりま

ではないかと、生きたここちもありません。あの口が、ガッとひらいて、いまにも、くわれてしまうの

するがいい。」だ、いろいろとおもしろいものがあるから、ゆっくり、見物だ、いろいろとおもしろいものがあるから、ゆっくり、見物「えへへへへ……。まあ、ゆるしてやるよ。この森には、ま

くりなのです。

くると、はなれてしまいました。て、マユミさんを地面におろし、巻きついていたのが、くる、そんな声がしたかと思うと、木のつるがずっと下にさがっ

ジャングルの王さま

マユミさんは、しばらくのあいだ、そこにたおれたまま、

した。みのあいだで、なにか、ちろちろと動いているものが見えまめのあいだで、なにか、ちろちろと動いているものが見えまぐったりとしていましたが、ふと気がつくと、むこうのしげ

きなシダのような葉をかきわけて、ヌーッと、こちらへ出てなんだか、青黒い、ぬめぬめしたやつです。そいつが、大

きました。

しましたが、ヘビではありません。足があるからです。 マユミさんは、大きなにしきヘビではないかと、ギョッと

でも、青黒いからだのワニなんて、あるでしょうか。ああ、ワニです。ヘビよりも恐ろしい、人くいワニです。

口を、ぱくぱくと開くたびに、赤黒い長いしたが、ちろちろニとそっくりです。とび出した二つの大きな目、とんがったそいつが、はんぶんばかり姿をあらわしました。形は、ワ

っていて、チョロッ、チョロッと歩くところが、トカゲそっもあるような、おばけトカゲです。からだが、ぬめぬめと光ああ、わかった。トカゲです。ふつうのトカゲの、何千倍

と、ほのおのようにとび出します。

人間をくってしまうかもしれません。へビほどこわくはないけれど、こんな大きなトカゲなら、

ったからです。した。身動きしたら、パッと、とびかかってくるだろうと思した。身動きしたら、パッと、とびかかってくるだろうと思くユミさんは、逃げたいのをがまんして、じっとしていま

ちらの顔を見ました。そして大きな口を、ガッと開き、あのマユミさんのそばまでくると、首をもたげて、じろりと、こ大トカゲは、チョロチョロとはい出してきました。そして、

テルスの見いようなしたを、ぺろぺろと出して、いまにも赤黒いほのおのようなしたを、ぺろぺろと出して、いまにも

マユミさんは、からだがしびれたようになって、動くことマユミさんの顔をなめそうにするのです。

めました。えものを見つけたうれしさに、おどりまわってい大トカゲは、マユミさんのまわりを、ぐるぐるまわりはじも、どうすることもできません。声さえ出ないのです。

トカゲも、なにかを恐れて逃げてきたのです。しかし、ほんとうは、そうでないことがわかりました。大

るようなかっこうです。

たになって、助けておくれよ。」。おたつにひきさかれてしまうからね。ねえさん、おれのみかがやってくるからね。おれは、あいつがこわいのだよ。まっ「ねえさん、用心するがいいよ。いまにジャングルの王さま

こうジャンデンでは、てがらりといっこり、トコデドらり子どものようなきいきい声で、そんなことをいいました。大トカゲは、マユミさんのまわりをぐるぐるまわりながら、

ャングルですから、なにからなにまで、ふしぎなことばかりをいったりするのです。西洋悪魔が魔法の力でこしらえたジこのジャングルでは、木がものをいったり、トカゲがもの

です。

どはそれが心配になってきました。しょう。どんな恐ろしいやつがあらわれてくるのかと、こん安心しましたが、ジャングルの王さまとは、いったい何者でマユミさんは、大トカゲが、あんがい弱虫なので、すこし

- 大トカゲが、また、きいきい声でいいました。えさん、用心するがいいぜ。」「そらっ、きたきた。ジャングルの王さまがやってきた。ね

やがて、もう一本の手があらわれ、両手で木の葉をかきわ茶色の毛におおわれていて、てのひらは、まっ黒です。から、人間の倍もある大きな手が、ヌーッとあらわれました。すると、むこうの木のしげみが、がさがさと動いて、そこ

ラがすんでいたのです。でさけた口。ああ、ゴリラです。このジャングルには、ゴリっています。ひらべったい鼻、黄色い歯をむきだした、耳ま頭も茶色の毛でおおわれ、その中に、ギロリとした目が光

けながら、恐ろしい顔を、のぞかせました。

まんができません。 そのものすごいかっこうを見ると、マユミさんは、もうがで、よたよたと、こちらへ近づいてきます。 巨大なゴリラは、もう全身をあらわし、ふといみじかい足

と、悲鳴をあげて、逃げだそうとしました。

「キャーッ!」

たではありませんか。 うな恐ろしい声がひびき、パッと、こちらへとびかかってきそのとき、ゴリラの口から、「グルルルル……。」というよ

ミさんではなくて、大トカゲでした。地面に身をふせましたが、ゴリラがとびかかったのは、マユーマユミさんは、いまにもつかみ殺されるのかと、おもわず、

大トカゲのきいきい声が、ひびきわたりました。「キューン! 助けてくれえ……。」

なって、大トカゲの首を持ちあげました。らの両手を、上あごと下あごにかけ、「グルルル……。」とうゴリラは、大トカゲにとびつくと、いきなり、毛むくじゃ

にひきさいてしまったのです。うと、そのままめりめりと、しっぽのほうまで、まっぷたつゴリラは大トカゲの口を、両手で、グーッと開いたかとおもつぎの瞬間には、じつに恐ろしいことがおこったのです。

とはいっていました。大きいのや、小さいのや、たくさんの歯車が、ウジャウジャ血が出ないのです。そして腹の中には、はらわたでなくて、上ところが、ふしぎなことに、大トカゲは、ひきさかれても、

と音をたてて、地面にこぼれ落ちたではありませんか。まっぷたつにひきさかれると、その歯車が、ジャラジャラ

ゲが、きいきい声でしゃべったのも、きっと、テープレコーまでこしらえる、ふしぎなうでを持っていたのです。大トカで動く作りものでした。西洋悪魔は、人形だけでなく、動物この大トカゲも、生きているのではなくて、歯車のしかけ

シャクシャにもつれて、あらわれたのです。と、歯車のあいだから、レコードのテープらしいものが、クを見ると、いきなり両手で、それをかきまわしました。する「ゴリラは、大トカゲの腹の中から、歯車がこぼれ落ちたの

ダーのしかけでしょう。

たマユミさんのほうに、恐ろしい顔をむけました。してしまうと、こんどは、そこに、ぼんやりとつっ立っていゴリラは、大トカゲのしがいを、めちゃめちゃにふみつぶ

ゴリラと大ワシ

マユミさんは、もう生きたここちもありません。いまにと

した。ひきさかれるのかと思うと、いまにも気がとおくなりそうでひきさかれるのかと思うと、いまにも気がとおくなりそうでびかかってきて、さっきの大トカゲのように、まっぷたつに

て、マユミさんをつかまえようとしました。のです。そして、毛むくじゃらの両手を、ニューッとのばしいや、笑ったのではないのでしょうが、そんなふうに見えたゴリラは、黄色い歯をむきだして、にやにやと笑いました。

が、魔女の髪の毛のように、いっぽうへなびきました。ろしい風がふいてきました。立ちならぶ大きな木の枝やつるそのときです。ピューッと、むこうのまっ黒な空から、恐

のが、空からふってきたのです。サーッという音が聞こえました。なにか恐ろしく大きなも

ギョッとしたように、空を見あげました。大ワシのほうでも、おりてきたのです。ゴリラは、マユミさんから目をはなして、トルもあるような、大きな羽をひろげて、風をきって、舞いたが、それは、一羽の巨大なワシでした。かたほうが二メーあんまり大きいので、はじめはなんだかわかりませんでし

ごいたたかいがはじまりました。(そこで、ジャングルの王さまと、空の王さまとの、ものすゴリラをめがけて、つっかかってきたのです。

人間のマユミさんなんかには目もくれません。 まっしぐらに

どい爪が、ゴリラの肩や胸にくいいるのです。大ワシにも、二本のたくましい足があります。その指のするうなって、両手で、大ワシの首をつかもうとします。しかし、をめがけて、とびかかってきます。ゴリラは「ウオーッ。」と大ワシは、その大きなするどいくちばしで、ゴリラののど

-53

した。あたりの木の枝も、ざわざわとゆれ、小さい草などはような風がおこり、マユミさんは吹きとばされそうになりまワシが、大きな羽をばたばたやると、飛行機のプロペラの

ラをつつむようにして、くちばしで、あいてののどをせめてあっ!(ゴリラがたおれました。大ワシは巨大な羽でゴリ

根もとからおれて、ほこりのようにとびちるのです。

て、ジャングルの王さまは、そんな弱虫でありません。 ゴリラはやられてしまったのでしょうか。どうしてどうしいます。

「ガアアッ、ウオオッ……!」

す。

ます。さすがの大ワシも、このかたいのどを、くいやぶるこや二をぬり、そこへ砂をぬって、鉄のようにかたくなっていめには、びくともしません。ゴリラの首は、あつい毛皮に松のくちばしが、じぶんののどにくいいるのですが、そんなこいと、じぶんの胸にしめつけています。そのたびに、大ワシという、恐ろしいうなり声がひびきわたりました。そして、という、恐ろしいうなり声がひびきわたりました。そして、

す。

「グルルルン、ゲゲゲゲゲ……。」とができません。

鳴をあげたのです。 みょうな音がひびきました。大ワシが首をしめられて、悲

だんだん、おとろえていきました。きな羽を、ばたばたとはばたくばかりです。そのはばたきも、大ワシは、もうあいてをせめる力もなく、苦しまぎれに大

重いからだで大ワシを下じきにして、おしつぶそうとしていくるっと、ゴリラが上になりました。そして、その巨大な

は、首をしめていた手をはなして、こんどは大フシの羽をねとうとう、大ワシは動かなくなってしまいました。ゴリラるめません。

らの中からは、またしても、かぞえきれないほどの大小の歯すると、ああ、これはどうしたことでしょう。大ワシのはじちぎり、腹をひきさきました。は、首をしめていた手をはなして、こんどは大ワシの羽をねる・・・・

車が、ジャラジャラとこぼれ出したではありませんか。

この大ワシも、西洋悪魔がこしらえた作りものだったので

ゴリラも、歯車で動く作りものかもしれないと思ったからでゲも、大ワシも、作りものだったとすると、ヒョッとしたら、マユミさんは、それを見て、ホッと安心しました。大トカ

ません。からだじゅうがしびれたようになって、そこにうずられると思いました。しかし、逃げようとしても、足がたちると、やっぱり気がとおくなるほどこわいのです。でも、あの恐ろしい目でにらまれ、黄色い歯をむき出され

ゴリラのけらいたち

くまったまま、どうすることもできないのでした。

ン、ボーンとたたくのでした。かちどきをあげているのです。ウオーッ。」と、うなり声をたて、両手でじぶんの腹を、ボーゴリラは、勝ちほこったように立ちあがって、「ウオーッ、

から、「きい、きい。」と叫び声をたてながら、たくさんのサ すると、それがあいずだったのか、ジャングルの奥のほう

とりかこんで、うやうやしく王さまを見あげながら、一ぴき す。顔とおしりのまっかな、ふつうのサルどもです。ゴリラ ャングルの王さまのけらいなのでしょう。ゴリラのまわりを たサルどもは、人間のこどもくらいのからだです。みんなジ は人間のおとなよりも、ずっと大きいのですが、いま出てき ルが出てきました。 一ぴき、二ひき、三びき……、八ひき。みんなで八ひきで

とうなってから、マユミさんのほうをふりむきました。そし のっしと、こちらへやってくるではありませんか。 て、こんどはおまえの番だぞ、といわぬばかりに、 ゴリラは、それに答えるように、もう一度、「ウオーッ。」 のっし、

ずつ、そこへうずくまるのでした。

「キャーッ! たすけてえっ……。」

りです。 できませんから、ありったけの声をふりしぼって、叫ぶばか マユミさんは、からだがしびれているので、逃げることは

ら、スーッと血がひいたようになって、なにも見えなくなっ まっぷたつにひきさかれるかと思うと、マユミさんは、頭か もうだめです。いまに、首をしめられるか、両足を持って、 ゴリラの巨大な毛むくじゃらのからだが、 ーメートルまで

ところが、そのとき、なんともわけがわからないことが起

てしまいました。気をうしなったのです。

こりました。

「ウオーッ!」

いるのです。 本の足に、三びきずつのサルがかさなりあって、とりついて のサルたちが、ゴリラの足にからみついてきたからです。一 ゴリラが、おこったようなうなり声をたてました。けらい

こへころがってしまいました。 六ぴきの力にはかないません。 ゴリラは、足でけちらそうとしましたが、小さいサルでも、 あっというまに、ゴリラはそ

「きい、きい、きい、きい……。」

逃げてはあつまり、逃げてはあつまり、執 念ぶかくせめてく るので、どうすることもできません。 をめったむしょうに動かして、はらいのけようとしますが、 の上へ、かさなりあっていきました。ゴリラは、四本の手足 サルどもは、よろこびの叫び声をたてて、ゴリラのからだ

りです。 「ガアアッ、ウオーッ……。」と、恐ろしい声で、ほえるばか

で、ギョッとして悲鳴をあげようとしましたが、そのとき、 こされていました。その毛むくじゃらのからだにさわったの 人間のことばが耳のそばで聞こえました。 マユミさんは、ふと気がつくと、一ぴきのサルに、だき起

密をあばいてやるから、見ていらっしゃい。」 「だいじょうぶですよ。ぼく小林です。いまに、あいつの秘

です。 起こしてくれたサルが、人間のことばをしゃべっているから マユミさんは、夢ではないかと思いました。じぶんを助け

「わかりますか。ぼく小林ですよ。」

探偵の助手としては、マユミさんよりせんぱいの、小林少年ません。しかしその声には、聞きおぼえがありました。明智てはサルです。サルが小林だなんて、さっぱりわけがわかりそんなこといわれたって、わかるはずがありません。あい

「あなた小林芳雄さんなの。」

の声です。

マユミさんは、かすかな声でたずねました。

「そうですよ。マユミさんを助けにきたのです。いまに、

明

「それじゃあ、あの西洋悪魔は。」智先生や中村警部もここへやってきますよ。」

「あれをごらんなさい。ほら、あすこにいますよ。」

っています。サルどもは、よってたかって、ゴリラの頭を、あの恐ろしいゴリラは、おおぜいのサルに、ひどいめにあマユミさんは、キョロキョロとあたりを見まわしました。

- ,)早には、、引ぎはいっていこ)です。 「 ・,)頁)3首ではありません。ゴリラの仮面をぬがせたのです。あのゴスポッとぬきとってしまいました。ぬきとったといっても、

分をぬきとってしまうと、その下から人間の顔があらわれまリラの中には、人間がはいっていたのです。ゴリラの頭の部首ではありません。ゴリラの仮面をぬがせたのです。あのゴ

した。

ゴリラの毛皮をかぶってばけていたのです。んとはねた口ひげと、あごひげをはやした、あの西洋悪魔が、あっ、西洋悪魔です。黒い髪の毛をまん中からわけて、ぴ

のです。

からだが小さいというので、そんなあだなをつけられていた

い、ぴったり身についた黒いシャツとズボンの姿になって、のか、西洋悪魔は、着ていたゴリラの毛皮もぬぎすててしまばけのかわをはがされたので、もうしかたがないと思った

すっくとそこに立ちあがりました。

ルが、人間のこどもの声で答えました。 恐ろしい声で、どなりつけるのです。すると、一ぴきのサにおれを、こんなめにあわせるとは、なにごとだっ。」 「やいっ、きさまたち、気でもちがったのかっ。手下のくせ

こうの部屋に、みんなしばりあげてあるのさ。」「おれたち、おまえの手下じゃないよ。おまえの手下は、む

「各世界原引に、こう。」))りないに、こうらりかなりに、何者だ。」

「えっ、なんだって? それじゃあ、きさまたちはいったい

の大きいサルが小林団長だよ。」さ。だが、団長もいるよ。ほらマユミさんのそばにいる、あ「少年探偵団と、チンピラ別働隊だよ。おらあ別働隊のほう

ルへしのびこんでいたのです。 少年探偵団とチンピラ隊とが、いつのまにか地底のジャングああ、これはどうしたことでしょう。小林団長のひきいる

やはりチンピラ別働隊のひとりで、ポケットへはいるほど、なくなってしまったポケット小僧でした。ポケット小僧は、マユミさんが、ロボットにせめられているとき、どこかへいあとになってわかったのですが、このてがらをたてたのは、

うに、家じゅうを歩きまわって、地底のジャングルの秘密もみ、からだの小さいのをさいわいに、だれにも知られないよて、小林団長に電話をかけて、西洋悪魔のすみかをしらせ、マユミさんがあぶないと見ると、すぐに町へとび出していっからだは小さいけれども、たいへんすばしっこい子どもで、

しらべてしまったのです。

リラが、ふいをうたれておどろいたのも、むりはありません。すいはめたのです。それから、団員とチンピラ隊から八人の少年をしばりあげ、声を出さないようにさるぐつわまポケット小僧とうちあわせたうえ、楽屋へとびこんでいって、人を呼びあつめ、自動車でこの家へかけつけました。そして、電話を聞いた小林団長は、すぐにそのことを明智探偵に知

ジャングルのとりもの

西洋悪魔の顔をながめるのでした。
い林少年も毛皮をぬいで、シャツーまいの姿をあらわしまいかった、ふたりの学生服の少年も出てきました。
ーターをきたチンピラどもです。奥のほうから、サルにならしました。白シャツに下着だけの少年たちや、ボロボロのセースぴきのサルは、つぎつぎと毛皮をぬいで、正体をあらわ

西洋悪魔は、にくにくしげに少年たちの顔を見まわしてい

ましたが、とつぜん、おかしくてたまらないというように笑

しました

ハハハハハ……。」 いまに、泣きべそをかかないように、用心するがいいぜ。ワうちには、きみたちの思いもつかない恐ろしいしかけがある。負けると思っているのかね。おれは、魔法つかいだぜ。このワハハハハハ……、だが、おれが、きみたちみたいなこどもに「ワハハハハハ……。小林君、なかなかあじなことをやるね。

ン、バンと、恐ろしい音がとどろきました。みんなの目の前が、パッとまっかになって、バン、バン、バと、地面のある場所を、足でグッとふみつけました。すると、西洋悪魔は、笑いながら、五―六歩右へよったかとおもう

花火です。どこかのボタンを足でふむと、花火があがるよい金色の粉になって、地面に落ちてくるのです。赤い火の棒が、てんじょうに吹きあがって、それが、美し

うなしかけがしてあったのです。

あらわれてきました。とズボンの、西洋悪魔と同じような姿の男が、魔物のようにから、ひとり、ふたり、三人、四人、五人、まっ黒なシャツがあいずだったのでしょう。ジャングルの木のみきのむこうみんなが、金色の花火に見とれていますと、その花火の音

くってしまえ。あのむすめも、逃がすんじゃないぞ。」さあおまえたち、このチンピラどもをかたっぱしからひっく「ワハハハハ……。おれのほんとうのけらいがやってきたぞ。

こちらはこどもが十人、あいては西洋悪魔をいれて六人で西洋悪魔が、勝ちほこったようにどなりました。

-5

は四方からあらわれたので、逃げるにすきがありません。す。とてもかないません。逃げようにも、黒シャツの男たち

と、悲鳴をあげました。きます。ひとりの少年が、たちまちつかまって、「ワーッ。」男たちは、にやにや笑いながら、両手をひろげて近づいて

れてきたのです。みきのうしろから、またしても黒いかげが、ボーッとあらわみきのとき、へんなことが起こりました。ジャングルの木の

のうしろへ近づいてくるではありませんか。人です。それが、つぎつぎとあらわれて、黒シャツの男たちす。おまわりさんの制服です。ひとり、ふたり、三人……七おやっ! こんどは、ぼうしをかぶって、制服をきていま

「あっ! 中村さん。」

ったのです。ほかの六人は、その部下の警官たちです。 小林少年が思わず叫びました。それは警視庁の中村警部だ

中村警部はそういって、うしろにいた小さい少年を、前に「おお、小林君、この子どもの案内でやってきたよ。」

「あっ、ポケット小僧!」

おし出しました。

ポケット小僧が、おどるようなかっこうをして叫ぶのでし生も、いまにここへくるよ。」「小林さん、よかったねえ、もうだいじょうぶだよ。明智先

た。

西洋悪魔は、身をかわしながら逃げまわっていましたが、き、あちこちで、恐ろしいとっ組みあいがはじまりました。警官たちは、いきなり黒シャツの男たちにとびかかってい

「こ、、、、、、、。、ここ、別こぶ、こうこと、またしても、大声で笑いだしたではありませんか。

まに、ほえづらかくなよ。」「おっとどっこい、きさまたちの手にあうおれじゃない。いいとりの警官が、西洋悪魔にとびついていきました。かいだ。この家に、どんなしかけがあるかも知らないで……。」「ワハハハハハ……。なに、明智がきたって?」そいつはゆ「ワハハハハハ

しかし警官たちは、こういうときの用意に、みんな懐中電てしまいました。電灯のスイッチをきったのです。チッと音がして、とつぜん、ジャングルの中がまっ暗になっパッととびのいて、木のかげに走りこんだかと思うと、カ

懐中電灯が光り、その光線が空間をとびまわるのでした。灯を持っていました。あちらでもこちらでも、パッ、パッと

黄金のトラ

こうのほうへ遠ざかっていくのです。パンと、手をたたきました。そして、その音が、だんだんむの洋悪魔は、じぶんのいるところをおしえるように、パンだからね。ワハハハ……。ほら、ここだよ、ここだよ。」ハハハハハ……。だが、用心するがいいぜ。この家には、いろ「ワハハハハハ……。ここまでおいて、ほら、ここだよ。ワハ

や大トカゲや大ワシのほかに、まだ動物がかくれているのでい動物なのかもしれません。この地底の暗やみには、ゴリラてある。」というからには、それは人間でなく、なにか恐ろしあいつはいま、「番人がかってある。」といいました。「かっ

しょうか。

のするほうへと、つきすすんでいきました。警官たちは、てんでに、懐中電灯を照らしながら、手の音

魔がかけこんでいくのが、懐中電灯の光で、チラッと見えまむこうに、まっ黒なほら穴の入口があります。そこへ西洋悪ジャングルの大きな木のみきのあいだをとおりすぎると、

「あっ、あすこにほら穴がある。いま、あいつが逃げこんだ

中村警部が、大きな声で命令しました。ふたりの勇敢な警ぞ。みんなあの穴へとびこむんだ!」

て、にやにや笑いながら、手まねきをしているではありませこちらをむいて、たちはだかっているのが見えました。そしふたつ角をまがると、懐中電灯の光のなかに、西洋悪魔が官が、その穴へかけこんでいきます。

、。 ていました。もう、手錠をはめられてしまったかもしれませこった四人の警官や少年探偵団員たちと、とっ組みあいをし善西洋悪魔の部下たちは、まだジャングルの中で、あとにの

ってきました。警官たちも、そこに立ちどまったまま進もうってきました。警官たちも、そればずはありません。こんできた小林少年とポケット小僧の五人です。いくらなんこんできた小林少年とポケット小僧の五人です。いくらなんそれなのに、どうしてあんなにおちつきはらっているのでしですから、ほら穴の中の西洋悪魔は、ひとりぼっちです。

としないのです。

動物の声です。猛、獣のうなり声です。しいうなり声が、ひびいてきました。人間ではありません。そのときです。どこからか、「ウオーッ……。」という恐ろ

灯を、そのほうにむけました。 みんなはギョッとして、声のするほうを見ました。懐中電

奥からひびいてきたようです。なっていたのです。あのうなり声は、どうやら、その枝道の右手にべつのほら穴の口がひらいています。そこが枝道に

「あっ!」

でしょうか。にを見たのでしょう? その枝道の穴の中に、なにかいるのにを見たのでしょう? その枝道の穴の中に、なにかいるの まっさきに立っていた警官が、思わず声をたてました。な

こちらへ出てくるのです。だんだん大きくなってきます。なにものかが、穴の中から、ピカッと光りました。金色のものです。そして、それが、

いまに、きさまたち、くわれてしまうぞ。」「ワハハハハ……。おい、用心しろ。番人が出てきたぞっ。

西洋悪魔は、そんなおどかしをいって、おもしろそうに笑

っています。

「あっ、トラだっ!」

じとあとじさりをしました。小林君が、それに気づいて叫びました。みんなは、たじた

のトラです。ラでした。しかも、そいつは金色に光っているのです。黄金穴の中から、ヌーッとあらわれたのは、一ぴきの大きなト

「ガア……ウオーッ……。」

な口をガッと開くと、また一声うなりました。 黄金の巨大なトラは、穴の外へ全身をあらわして、まっか

「ほら、あのおまわりさんをやっつけろ。あっちがわにいる

のは、みんな、おれの敵だ。わかったか。」

したがって、ヌーッとこちらをむきました。二つの目が、ら西洋悪魔は、大声でトラをけしかけました。トラはそれに

んらんとかがやいています。

「ウオーッ……。」

のそり、のそりと、こちらへ近づいてきます。 するどい牙をむきだして、もう一度うなりました。そして、

ら、らどり場所こうではっているではありませらか。ろが、ポケット小僧だけは、へいきです。にやにや笑いなが、警官たちも、小林君も、逃げごしになっていました。とこ

「おい、ポケット小僧、あぶないよ。はやく逃げろ!」ら、もとの場所につっ立っているではありませんか。

たい、これはどうしたわけでしょう?りむいて、いみありげに、また、にやりと笑いました。いっ善小林君が、心配して声をかけますと、小僧は、こちらをふ

こちらに近づいていたトラが、ふっと立ちどまったのです。ところが、そのとき、みょうなことが起こりました。

そして、ゆっくりと、まわれ右をしました。西洋悪魔のほう

を、やっつけるんだ。」「おい、なにをしている。こっちじゃない。そこのおまわり

に、むきなおったのです。

しかしトラは、ゆうゆうと西洋悪魔のほうへ近づいていき西洋悪魔はびっくりして、トラをどなりつけました。

羊悪癒ここがかかったがはありませしか。ーツ……。」とひと声、パッとおどりあがって、いきなり、西ます。そして、一メートルほどに近よったかと思うと、「ウオ

洋悪魔にとびかかったではありませんか。

「ギャーツ・・・・・。」

トラは、その上にのしかかって、いまにも、相手ののどへ西洋悪魔が、恐ろしい叫び声をたててたおれました。

「ワハハハハ……。」

くいつきそうにしています。

どこからか、西洋悪魔のとはちがった、ほがらかな笑い声

がひびいてきました。

した。 トラの出てきたあのほら穴から、だれかの姿があらわれまみんながびっくりして、そのほうをながめます。

「あっ、明智先生っ!」

とした姿が、そこに立ちはだかっていました。ろへきていたのでしょう。いつもの黒い背広をきた、すらっそれは名探偵明智小五郎でした。いつのまに、こんなとこ小林君が、うれしいおどろきの叫び声をたてました。

「ワハハハハ……、赤堀さん、もういいから、皮をぬぎたま

中から、人間のしらが頭が、ニュッと出てきたではありませがやっていたかと思うと、おなかが、たてにスーッとさけて、かかっていたトラが、あと足で立ちあがって、なにかもがもんとは、いったいだれでしょう。どこにいるのでしょう。明智探偵が、わけのわからないことをいいました。赤堀さ

んか。

ああ、これはいったい、どうしたというのでしょう。

さいごの切り札

毛皮の中に、 っていたのでしょう。 っそり弟子入りをして、明智探偵の手だすけをするようにな 偵の弟子になりたいといっていましたが、いつのまにか、こ まった、あのよっぱらいじいさんです。じいさんは、明智探 み、よろいびつにかくれていると、外から釘をうちつけてし 州老人です。小林君が少女にばけて、おばけやしきにのりこ どこかに、見おぼえがあります。ああ、そうだっ! 赤堀鉄 の人間が、 でしょう。 の毛皮の中に、人間がはいっていたのです。あのうなり声は すっかり毛皮をぬいでしまったのは、しらがの老人でした。 黄 金 のトラは、ほんとうのトラではなかったのです。トラ 口でそれを動かしていたのにちがいありません。 口がひらくのも、ちょうつがいになっていて、 なにかそんな音を出す笛が、しかけてあった たの

どなりはじめました。 赤堀じいさんは、たおれている西洋悪魔をにらみつけて、

にきまっている。わしを焼き殺そうとした、あの人形悪魔だ西洋悪魔に姿をかえているが、きさまは、あの人形じいさんルミちゃん人形を、甲野さんのところへとどけさせただろう。さまは、この赤堀鉄州の名まえをかたって、木の宮運送店に「こら、きさま、よもや、おれの顔を、わすれやしまい。き

つ。

聞は E くいの いまし、いい へいがい いぶまし。 入りした。そして、ここにいるポケット小僧の手びきで、明れりしは、そのうらみをはらそうと思って、明智先生に弟子

智先生といっしょに、ここへしのびこんできた。

こへあらわれるということもちゃんとわかっていた。たんだ。だから、きさまの手下がこのトラの毛皮をきて、こきさまの計略は、ポケット小僧が、みんなさぐり出してい

たのだ。 わしが毛皮にはいって、ここへあらわれろがし、かわりに、わしが毛皮にはいって、ここへあらわれていたきさまの手下をひっとらえ、しばりあげて穴の奥にこそこで、明智先生が先手をうって、この毛皮の中にはいっ

たかっ。」 ことはない。ワハハハハ……、やい人形悪魔め、おもいしっはらしたぞ。ああ、わしはせいせいした。こんな気持のいい「ワハハハハ……、ざまを見ろ。わしは、とうとううらみを

り、けりとばすのでした。 赤堀老人はそういって、たおれている西洋悪魔を、思いき

ポケット小僧だったのです。かりました。明智探偵や赤堀老人を、ここへ案内したのは、これで、ポケット小僧が、へいきな顔をしていたわけがわ

「ちくしょうめ!」

ット小僧につかみかかろうとしました。 西洋悪魔は、むくむくと起きあがり、恐ろしい顔で、ポケ

それを見ると、明智探偵がつかつかと前に出て、西洋悪魔

みの秘密は、なにもかも、みんなわかってしまったのだ。」「おい、じたばたしないで、もう、かんねんするがいい。をつきとばしました。

西洋悪魔は、ほら穴の壁に背中をくっつけて、明智をにら

みかえしながら、

がみんなわかってたまるものか。おれのほうには、奥の手が「なに、おれの秘密だと。ワハハハハ……、きさまに、それ

「その奥の手も、わかっている。もう運のつきだと思うがい

あるんだぞっ。」

明智はしずかに、いってきかせるのでした。

だ。きみのとくいの奇術にすぎない。 がしかないようにしてあるので、あんなに広く感じられるののだ。光線のぐあいで、その絵とほんものとのさかいめが、あれはパノラマ館のしかけで、ほんとうの木は、わずるが、あれはパノラマ館のしかけで、ほんとうの木は、わず形悪魔だ。しかし、種をわってみれば、みんな子どもだまし形地の底に、これだけのしかけをつくったのは、さすがに人「地の底に、これだけのしかけをつくったのは、さすがに人

もだましじゃないか。 大ワシや大トカゲも、てんじょうから、目に見えないよう まに見せかい。大のシャがとで、つってあったのだ。そのものだから、おけのないことだ。声は、みんないのが、大のがでいるがですが怪物の顔に見えたのも、木そのものが、 な細いじょうぶなひもで、つってあったのだ。それを、あや

は、金や宝石をぬすむためにもつかわれたが、もっとほかに、くり、世間をおどろかそうとしたのは、なんのためだ。それきみが人形じいさんになって、いろいろな人形や動物をつ

「フフン、それをきさまが、知っているのか。」

目的がある。」

コミっ、こうぼこと、らっこいったこいっこうご。よぜいこうきみの目的は、世間をあっといわせたかったのだ。世間の西洋悪魔は、にくにくしくいいはなちました。

明智は、そこでことばをきって、にこにこと笑いました。にはない。え、きみ、きみのほんとうの名をいってやろうか。」でいる男、また、世間をあっといわせてよろこぶ男は、ほかそのうらみが、はらしたかったのさ。それほどぼくをうらんいうと、きみはぼくに、たびたび、ひどいめにあっている。中でも、このぼくを、あっといわせたかったのだ。なぜかと

は、顔をおさえたまま、ギョッとしたようにたちすくみましピシッと、むちでうつような名探偵の声でした。西洋悪魔「待てっ、きみのほんとうの名は、怪人二十面相だっ!」魔のように、両手で顔をかくして、逃げだそうとしました。すると、西洋悪魔は、まるで神さまの前に出たほんとうの悪

た。しかし、すぐに気をとりなおして、顔から手をはなすと、

ろっ。」の、もうこうなれば、さいごの切り札だっ。いまに見っ。よし、もうこうなれば、さいごの切り札だっ。いまに見「きさま、またしてもおれを、ひどいめにあわせやがったな

でした。

血ばしった目をカッとひらいて、

明智探偵をにらみつけるの

って、矢のようにかけ出したのです。と叫ぶやいなや、パッと走りだしました。ほら穴の奥にむか

ケット小僧だけは、みんなとはんたいの方角に走りだしたで警官も、小林少年も、そのあとを追いました。ところが、ポ「それっ」というので、明智探偵も、中村警部も、ふたりの

-6

にをしにいくのでしょうか。ほら穴の入口のほうへもどっていくわけです。いったい、なばかりやる少年です。はんたいの方角というのは、つまり、はありませんか。ポケット小僧は、いつでも、いがいなこと

ん。から、その早いこと。なかなか追っつけるものではありませから、その早いこと。なかなか追っつけるものではありませましたが、西洋悪魔の二十面相は、もう死にものぐるいですこちらでは、明智探偵たち五人が一生けんめいに追っかけ

ライターで、それに火をつけたのです。のです。そこにたいまつが用意してあって、いつのまにか、りました。二十面相は、燃えるたいまつをふりかざしているみました。逃げこんだかと思うと、そこが、パッと明るくな二十面相は、ほら穴の奥の部屋のようなところへ、逃げこ

吹っとんでしまうのだ。」も、ジャングルも、その上にたっている西洋館も、みんな、わり、きさまたちも、みんな死んでしまうのだ。この地下道「ワハハハハ……、さあ、おれのさいごを見てくれ。そのか

しく見えます。 赤い火に照らされて、西洋悪魔の顔が、赤おにのように恐ろニ十面相は、気ちがいのようにわめきました。たいまつの

大きなドラムカンがおいてあります。たいまつを、ぐるぐるふりまわしているその下に、一つの

なにもかも、こっぱみじんになってしまうでしょう。いまつを投げこむつもりです。そうすると、火薬が爆発して、いっぱいつまっているのでしょう。二十面相は、その中へたあっ、たいへんです。きっと、あのドラムカンは、火薬が

まつを投げこむでしょう。それを思うと身うごきもできませのひまはありません。一歩ふみ出せばあいつはきっと、たいまいました。とびかかって、たいまつをもぎとろうにも、そそれを聞くと中村警部も警官たちも、まっさおになってし「さあ、かくごしろ。みんないっしょに死ぬんだぞっ。」

「ワハハハハ······。」

気でもちがったのではないかと、うたがったのです。中村警部たちは、びっくりしてその顔を見つめます。明智はなにがおかしいのか、明智探偵がいきなり笑いだしました。

きみのさいごの切り札は、すっかりだめになってしまったのかけておいた。見ろ! そのドラムカンの中は水びたしだ。薬の秘密も知っていたのだ。だから、火薬に水を、たっぷりはすっかり知っているといったじゃないか。むろん、その火火が消えてしまうよ。おい、二十面相、ぼくは、きみの秘密「ワハハハハ……、投げこんでみたまえ。シュッと音がして、

二十面相は、もう、ものをいう力もなく、へなへなと地面り、その中は水びたしです。の火で、ドラムカンの中をのぞきました。明智のいったとおそれを聞くと、二十面相はギョッとしたように、たいまつ

た。たちまち手錠がはめられ、そのうえ用意の縄で、ぐるぐ「それっ。」というと、ふたりの警官が、とびついていきましにうずくまってしまいました。 二十面相に もう ものをいう力もなく へなへなと地面

そこへ、ポケット小僧をさきにたてて、おおぜいの少年が

る巻きにしばられてしまいました。

団のばんざいを、となえるのでした。
「ワーッ、すてき。明智先生ばんざーい!」
「ワーッ、すてき。明智先生ばんざーい!」
「カれが二十面相だよ。明智先生は、とうとう、二十面相をかけつけてきました。その中にマユミさんもまじっています。